

東京大学
— 中国語サマースクール —
活動報告
2013

ゼンショー 東京大学・南京リベラルアーツ・学生交流プログラム
ZENSHO U Tokyo Nanjing Liberal Arts Student Exchange Program

目次

ご挨拶——LAPの学生交流.....	4
プログラム概要.....	5
中国語サマースクール概要／記念式典・記念講演／南京で思いっきり学んでみよう	
活動内容紹介.....	13
活動後記.....	59
学生感想／教員所感	
次年度に向けて.....	80

LAPの学生交流

ゼンショー 東京大学・南京リベラルアーツ・学生交流プログラム（以下学生交流プログラムと略）は、株式会社ゼンショーホールディングス（以下ゼンショーホールディングスと略）からのご寄附にもとづき、日本と中国の将来を担う人材を育成するため、東京大学が中国の大学と行う学生交流の教育プログラムです。中国を代表する大学のひとつである南京大学と連携し、リベラルアーツ教育を通して、双方の学生がともに考え、ともに啓発する中で信頼関係を育み、豊かな人間性を備えた知中派・知日派となることを目指します。

南京は、江南の才子と呼ばれる優秀な人材を輩出してきました。そして、日本と中国の関係を考える上で、象徴的な意味を持っています。歴史を踏まえ、未来を切り開く人材を育てる上で最適の場所です。

リベラルアーツ・プログラム（LAP）は、南京大学をパートナーに、文理融合のテーマを取り上げて集中講義を開講するとともに、春と秋に学生交流を実施してきました。この蓄積をもとに、ゼンショーホールディングスのご協力をいただき、この学生交流プログラムがスタートしました。

学生交流プログラムは、次のプログラムから構成されます。

(1) タフな東大生を育て、知中派の育成をめざす

① 南京大学集中講義学生交流（三月）

東京大学の学年と専門の異なる学生と院生の混成グループを南京大学に派遣し、集中講義を受講するとともに、南京大生とフィールドワークによる共同研究を行います。

② 中国語サマースクール（八月）

東京大学の中国語履修者から選抜された学生を中国へ派遣し、中国語の集中特訓と中国を知るための講義と研修を行います。

(2) 多様な知日派の育成をめざす

③ 東大一週間体験プログラム（二月）

南京大学の日本語履修学生から選抜された学生を東京大学に招聘し、一週間にわたり授業を聴講し、東大生とフィールドワークによる共同研究を行います。

プログラムを円滑に実施するために、「東京大学 ZENSHO 南京教養教育交流中心」が南京大学に設けられています。

*

本活動報告はののうち中国語サマースクールに関するものです。中国語サマースクールは二〇一三年度より、東京大学グローバルコミュニケーション研究センターTLPと共同で開始しました。本報告は二〇一三年度サマースクールに関するものであり、新たなプログラムに執行委員一同試行錯誤を続けております。今回の参加学生による活動報告、及び感想をもとに、今後本プログラムをより充実させるよう、努力して参る所存です。

汉语课程介绍

プログラム概要

中国語サマースクール概要

サマースクールでは現地で語学学習に専念することができます。中国語の実力を磨き、中国への理解を深めるために、朝から晩まで中国語漬けとなる充実したカリキュラムが用意されています。

授業の目標

中国語は中国のみならず、台湾、シンガポールの公用語でもあり、また世界各地に散在している華僑の間でも使用されている言語です。その使用人口は1億人を上回ると言われています。つまり、中国語は中国の文化や社会を知るためだけでなく、世界的な知的交流にも欠かせない言語といえるでしょう。東アジアを足場に国際的な活躍をめざすなら、中国語を使いこなし、英語と日本語を含めたトライリンガルとなることが理想となるでしょう。

語学の習得には、集中的な訓練がもつとも効果的だと考えられます。様々な講義を受講する学期中とは異なり、サマースクールでは現地で語学学習に専念し、肌で中国文化や人々の生活を感じることができます。南京大学サマースクールでは、中国語の実力を磨き、中国への理解を深めるために、朝から晩まで中国語漬けとなる充実したカリキュラムが用意されています。まず、中国語授業は学生のレベルを二つ分け、会話、総合、作文という三種類の能力が向上できる授業を提供されています。担当教師全員は、外国人学生に中国語を教授する経験が豊富です。そして、中国文化の一端に触れる機会として、篆刻、書道、太極拳などの授業や、揚州・廬山見学もカリキュラムに組みれています。授業終了時、中国語テストを実施し、修了時には中国語サマースクール修了証明書が与えられます。

提出課題としては、ブログ形式の日記（『南京日報』）と履修感想が求められます。ブログの日記はサマースクール期間中に一人が一日分担当し、記事及び写真をブログに掲載してもらう課題です。この課題は、単なる日々の記録だけではなく、自分

の周囲の環境から様々なことを発見し、また絶えず思考することを促す「媒体（メディア）」として設定されたものです。また、次年度以降のプログラム改善のため参加感想を書いて貰います。

なお、南京大学中国語サマースクールは、教養学部グローバルコミュニケーション研究センターと連携し、授業は東京大学と中国の大学の双方の教員によって行われます。

実施時期

二〇一三年八月四日～八月二十五日

実施場所

中国南京大学海外教育学院

授業計画

南京大学海外教育学院において、聞く、話す、読む、書く能力を三週間にわたり、集中的に訓練する。授業はグローバルコミュニケーションセンターの教員と南京大学の連携で実施される。二〇名を一〇名の少人数クラス二班に分け、月曜から金曜

8月

日	月	火	水	木	金	土
4 宿舍入り 歓迎会	5 班分け試験 キャンパス見学 太極拳	6 中国語（会話） 中国語（総合） 中国書画	7 南京博物院見学	8 中国語（作文） 南京大生との交流	9 講義「南京の歴史」 太極拳	10 中山陵見学
11 揚州一日観光	12 中国語（会話） 中国語（総合） 企業見学	13 中国書画	14 夫子廟、秦淮河観光	15 中国語（作文） 南京大生との交流	16 講義「中国の経済問題」 太極拳	17 江蘇省昆劇院昆劇鑑賞
18	19 中国語（会話） 中国語（総合） 太極拳	20 中国書画	21 廬山観光	22	23	24 閉会式

サマープログラム日程（予定）※

※南京大学側教員及び参加学生の都合により、一部プログラムを変更して実施した。

まで午前中三〜四時間の中国語学習を行い、午後は中国事情の講義、見学などを行う。

事前準備

- 一、日本人は中国で二週間以上の滞在にはビザの作成が必要です。そのため、事前説明会までにパスポートを用意すること。
- 二、長期の海外滞在は体力的負担が大きいです。出発するまでにきちんと体調を整え、基本的な体力を鍛えること。それから、簡単な薬品、ビタミン剤を用意し、現地へ持参すること。
- 三、現地滞在をさらに充実させるために、出発までに中国近現代史、南京の歴史・地理などの基礎知識を身につけておくこと。

LAP事務局から提供する通信設備

- 一、中国用携帯電話 二台
- 二、無線LANチューナー 五台
- 三、LANケーブル



ゼンショー・東京大学・南京リベラルアーツ・学生交流プログラム

記念式典・記念講演

このたび株式会社ゼンショーホールディングス（以下ゼンショーホールディングス）からのご寄附に基づき、東京大学教養学部付属教養教育高度化機構と南京大學海外教育学院との間で「ゼンショー・東京大学・南京リベラルアーツ・学生交流プログラム」（以下ゼンショープログラム）がスタートしました。これに伴い、南京大學に「東京大学 ZENSHO 南京教養教育交流中心」（以下交流中心）が設置されました。これを記念して、二〇一三年五月二七日、南京大學にて記念式典が挙行されました。式典には、ゼンショーホールディングスより小川賢太郎氏（代表取締役会長兼社長）、飯谷欣三氏（ゼンショー中央食材研究所所長）、近藤秀樹氏（ZBC制作課主任）、馬文軍氏（青島代表処マネジャー）、南京大學より陳駿氏（学長）、濮励傑氏（学長助理）、孫雯氏（対外交流合作処副処長）が出席し、東京大學より羽田正（副学長、石井洋二郎（総合文化研究科長）、杉山健一（総長室顧問）、刈間文俊（総合文化研究科教授）、下田浩美（渉外部シニア・ディレクター）、白佐立（ゼンショー南京プログラム特任助教）が参加しました。式典終了後、「交流中心」プレート除幕式が行われました。同日夜、南京大學仙林キャンパス学生交流講堂にて、小川氏による記念講演が開催されました。講演テーマは「株式会社で世界から飢えと貧困を撲滅する——安全な食を世界に」で、約一三〇名の南京大學生が聴講し、講演後は活発な質疑・討論が行われました。

LAPでは、東京大学と南京大学の過去一〇年間の交流経験を踏まえた上で、ゼンショーホールディングスからのご寄附を生かし、両校の交流をより一層深め、より高度な教養教育プログラムを創出して参ります。



- 1 「日本東京大学漢語培訓實習基地」プレート除幕式の様子。右より順に、朱小易氏、陳駿氏、羽田正、小川賢太郎氏、石井洋二郎、刈間文俊、杉山健一氏（総長室顧問）、飯谷欣三氏。
- 2 小川賢太郎氏による記念講演「株式会社で世界から飢えと貧困を撲滅する」の様子。
- 3 除幕式での陳駿氏と羽田正。
- 4 記念式典での小川賢太郎氏、陳駿氏、及び羽田正。
- 5 「東京大学 ZENSHO 南京教養教育交流中心」プレートと小川賢太郎氏。
- 6 記念式典の様子。
- 7 記念式典での羽田正による挨拶。



南京で思いつきり学んでみよう

刈間文俊

新しい言語を学ぶというのは、じつに刺激的な体験だ。たとえ目の前に広がる情景は同じでも、それを異なる言語で表現しようとすれば、おのずと微妙な差異が生じる。

頭にぼつりぼつりと雨が落ちてくれば、「雨が降ってきた」と感じる。というか、そう表現するのが日本語だとすれば、中国語は「降ってきた」と自分が感じている現象が先に来て、それから「雨だ」と表現する。なんと感覚的なのだろう、中国語を習いたての頃に思ったものだ。漢字で書けば「下雨」という語順になる。

情景を写し取るこの微妙な差異と異なる価値観のもつ多様性の面白さを知ることこそ、新しい言語を学ぶ醍醐味である。

せっかく学ぶ新しい言語だ。これを思いっきり学んだら、どのような世界が開けるのだろうか。やる気のある学生諸君にその機会を提供し、朝から晩まで中国語の勉強漬けにしてみる、それが今年度から始まった二年生を対象にした中国語のサマースクールだ。場所は中国の南京大学。ここで八月の三週間、

朝の八時から遅い時には夜の九時過ぎまで授業が続く日もあるという、みっちりとかリキュラムを組んだ特訓サマースクールである。

宿舎と教室がキャンパス内の隣同士の建物という環境で、延べ八〇時間に上る中国語の授業と中国関連の講義が行われ、これに太極拳や中国書道の体験講座や企業見学などが加わるというハードスケジュールであった。予習のために睡眠時間を削って頑張った者も多かったようである。南京は「中国の三大ストープ」といわれるほど夏の暑さで知られるが、連日四〇度近い猛暑のなか、学生諸君は勉強に励んだだけでなく、自分たちで茶道の交流会を企画するなど、じつによく頑張った。立派なものである。南京大学の先生からも、サマースクールでこれほど勉強した学生は初めてだという賞賛をいただいたほどである。

参加者は一九名、文系と理系の比率はほぼ半々で、男子が一三名、女子は六名であった。参加希望者が多かったため、事前に中国語による試験を行い、選抜を行った。

その充実した三週間は、「南京日報——Nanjing Journal」(注：後掲の「活動内容紹介」を指す)と題された学生たちのブログに、同時進行的に記録されている。新鮮な感覚で中国をとらえ、未知なる世界を知ろうという好奇心が満ち溢れた、素晴らしい記録となっている。その体験は、いまじつに貴重である。

日本と中国の関係は、戦略的な互惠関係といわれる段階に入り、ときに緊張をはらんだものとなっている。このような時期だからこそ、お互いに相手をよく知る人材が必要となる。相手の言語を習得することはもちろん、抽象的な中国人や日本人という概念を超えて、個人の顔が見える関係を築くことが重要となる。相手への敬意と自らを相対化する広い視野を得ることが、ますます求められている。

サマースクールに参加した学生は、その一端をつかんでくれたのではないだろうか。ブログの記録に加えて、報告集もまもなくでき上がる予定である。教養教育高度化機構国際化部門のLAPのホームページを、ぜひご覧いただきたい。

中国語には「一回生二回熟」という言い方がある。



「二度目は見知らぬ仲でも、二回目には親しくなる」という意味だ。駒場キャンパスと南京大の間では、さまざまな交流が行われている。南京大の日本語履修学生を招いて、授業の聴講や共同研究を行う「東大大学一週間体験プログラム」（二月）や、本学の教員が南京大で開講するリベラルアーツ集中講義に合わせて学生を派遣する交流（三月）が、それだ。これらの交流プログラムにも、サマースクールの参加学生が積極的に関わってくれている。学生の間の「熟」の関係が深まっていくことを、大いに期待している。



南京大と行ってきた多彩な教育交流に対して、南京大と南京市の推薦を受けて、二〇一三年の江蘇友誼賞を受賞する榮譽に浴した。これはLAPが行ってきた教育交流のモデルが評価されたもので、プログラムが受賞する形が中国にはないため、私が代表して賞をいただいた。これも講義や引率でご尽力いただいた先生や意欲的な学生諸君のおかげである。この学生交流には株式会社ゼンショーホールディングスから寄附金のご支援をいただいている。併せて感謝する次第である。

今年の夏には第二回目のサマースクールが実施さ

れる。学生の声を取り入れ、教材を事前に配布するなど、さらなる充実を図るつもりである。後期課程の学生を対象にした新しいサマースクールも計画している。南京で思いっきり中国語を学んでみたいという皆さんの積極的な挑戦を待っている。

『教養学部報』五六二号、二〇一四年一月八日より転載）

刈間文俊 リベラルアーツ・プログラム執行委員長。東京大学大学院総合文化研究科教授（表象文化論）。専門は中国映画史、中国現代文芸。一九八〇年代以降の中国文芸に関心があり、新しい文化状況を追いかけるとともに、サイレント時代の中国映画にも魅力を感じている。これまでに中国映画の字幕を二〇〇本近く手がけてきた。

活動内容紹介

サマースクール期間中、参加学生は毎日当番制で日誌「南京日報——Nanjing Journal」を執筆した。
以下に全日の記事を紹介する。

一日目

不安で青ざめる

南京着、歓迎会

今日から中国語サマースクールが始まった。このプログラムの趣旨を説明すると、「中国語を一年間学んだ学生を三週間中国語づけにすることでどのような変化がみられるか」といったようなものである。参加者は総勢一九名である。以下では簡単に初日についてまとめる。

私たちは成田空港一三時発の便で南京へ渡った。初の飛行機ということで、FとNは非常にはしゃいでいた。

飛行機に乗るやいなや、もう辺りは中国語で埋め尽くされていた。僕は必死で聞き取れる単語を探し、必死で飲み物を注文し、それに疲れると眠りに落ちた。記憶に残っていることは、隣に座っていたある同学が中国語でコーラを注文したのに、乗務員に「ペプシね」と返されて若干恥ずかしそうにしていたことである。

空港につくと現地の空気は確かに蒸していたが、想像していたほど熱くはなかった。両替を済ませると、私たちはバスで一時間かけて南京大学へと向かった。高速道路の周りにはたくさんさんの広告（広告にはどれも電話番号が記されていた）と、いつ完成するのかわからない建設中のビル群が並んでいた。なかでも、さびれた家々が連なる地区におそろしく巨大なショッピングモールが腰を据えている光景はひとときわ僕の目を引いた。

南京大学には午後六時近くに到着した。簡単に宿舍や教室についての説明を受けると、私たちはすぐに歓迎会に出席し、南京大学の教授とともに食事をとった。料理は豪華で食べきれないほどの量があり、日本の料理に比べると心なしかしょっぱく感じた。現地の教授が挨拶の際に、「優秀なあなたたちなら……」といった類の言葉を述べるたびに、僕の心はなんだか不安で青ざめていったような気がする。

明日は九時からテストがあるということもあり、食事は午後九時すぎには解散となった。サマースクール初日の今日は、一日を通して自分の中国語の能力がいかに低いかを改めて実感した日であった。空港や機内で聞こえてくる中国語はもちろん、教授がゆっくりと話すスピーチでさえもどれだけの学生が満足に聞き取れていただろうか。ましてや刈間先生のように、中国語を用いて流暢に会話をこなすなど、現状はるかかなたの夢である。

せっかくこのような中国語に集中して取り組めるまたとない機会を得たからには、ぞんぶんこの機会を活用し、できる限り中国語の運用能力を高めたい。「よく食べ、よく遊び、よく学びなさい」。ある教授のこの言葉を胸に、中国での日々を過ごしたいと思う。残りは二〇日である。



二日目

おいしい油と 古本屋

班分け試験 キャンパス見学

南京二日目の朝はテストにより幕を開けわれわれは二つのクラスに分割された。

そして本日の予定が変更となり三時まで自由行動の時間が与えられたので大学周辺を散策することにした。

大学周辺は交通量が多いものの人があまり多くなく比較的落ち着いている。空気は悪くないし、匂いも微かに生ごみ臭がする程度である。しかし兎に角暑い。確かに東京の夏と同程度あるいはそれより僅かに気温は低いのだが、東京の夏がそもそも暑いのでこちらの夏も大変暑い。湿度が多く日陰に居ても過ごしづらいのも東京と変わらない。時折吹く風のみが唯一の救いである。そうした中を歩いてゆくと汗のために服が湿り大変きまりが悪い。街では上半身裸の男性を時折見かけるが、おそらくあれが最も正しい装いなのであろう。

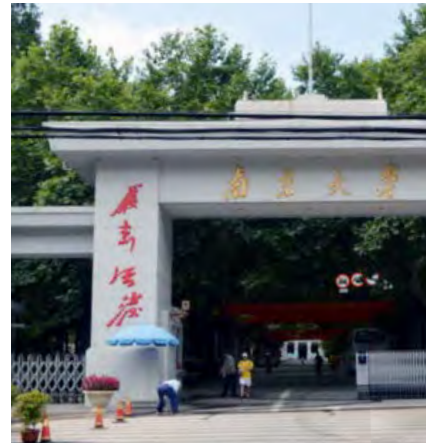
宿舎の前には大きな道路があり、両脇に街路樹があるものの少し殺風景である。しかしその大通りから一本脇に逸ればそこには味のある風景が存在する。

炒面や炒飯、湯面に包子といった文字が書かれた赤い看板。外との間に仕切りの存在しない大衆食堂。店主が仰向けにひっくり返った売店。外国に来てこうした雑然とした雰囲気求めてしまうのはあまりよろしくないという意見もあるのだが、自分の育った環境故に致し方ないところでは割り切ることにする。こうした通りにある店の一つに入るとまたしても真っ赤な看板が目に入る。その中から炒面を選んで注文すると、どんぶりの中に脂ぎった焼きそばが

入れられてやってくる。とてもおいしい。脂ぎっていて。とても熱くて脂ぎっていて、こんな時には冷えた水が尋常でないほど美味しい。

本当は青島ビールが飲みたいのだが、様々な方の協力のお蔭でこのように南京で中国語を勉強させていただく機会に恵まれたので、ここは堪えることにした。ちなみに青島ビールはさっぱりとしていて大変おいしい。大量に、浴びるように飲みたいと思えるほどである。しかも安い。牛乳より安い。

おいしい油でおなか一杯になったところで、次に古本屋に入った。流石大学近くの古本屋だけあって品揃えが良い。中国近現代文学の棚には老舍や茅盾をはじめとした有名作家の作品がずらりと並んでいる。日本では中国近現代文学の翻訳はあまり多くなく、あっても古い翻訳がぶ厚い本に収められてひっそりと眠っていることが多い。何より原文の雰囲気的大事であるからして、ここで買わない手はない。南京から帰るときには段ボール一杯に本を詰めて持って帰りたい。そして何よりいつか近いうちにそれらをしっかりと読めるようにしたい。その為に南京での学習が役立つよう努力することが肝要である。今日のこの報告を見ればわかるように、一日に占める中国語使用時間は現状ではとても少ない。友人同士では常に中国語で話すという試みが可能なレベルにまで到達しそれが実践される日が一日でも早く来るようわれわれは努力せねばならない。この宣言は教条ではなく行動の指針である。



三日目

太極拳と小籠包

会話、総合、中国書画

南京三日目、このサマースクールが始まって最初の講義が行われた。

朝八時、各々の学生は振り分けられた二つのクラスに分かれて部屋に入り、会話の講義を受講した。A班では自己紹介を中心とした授業、B班では教科書の会話の音読を中心とした授業が行われた。また、この授業では各々に南京大学の学生証が配布された。期間限定とはいえ、正式に南京大学の学生として滞在することを改めて認識し、サマースクール参加メンバー各々が勉学に励むという意思を一層強いものとしたであろう。

二コマ目の授業は総合授業であった。ハプニングによってA班とB班で合同の授業が行われるという事もあったが、つつがなく講義は執り行われた。

今回我々が受講する授業は一コマあたり一一〇分である。九〇分の授業になった東大生は若干まだ調子がつかめないようであった。

午後には二コマの中国文化についての授業が行われた。一コマ目は中国の書道についての講義及び作る印鑑のデザインについての話をを行った。二人ほど寝坊して遅れるという事件もあったが、授業はつつがなく行われた。

二コマ目は太極拳の授業が行われた。全員で南京大学のユニフォームを来た東大生が二階のロビーで太極拳をする様子は壮観であったのであろうか？多くの他の留学生や現地の学生の注目的となっていた。

さて、今回は二箇所、南京の店を紹介したい。

一つ目は南京大学周囲で一番大きい本屋である。

“先鋒書店”という名の本屋で、地下駐車場を改修して作られた巨大な本屋である。

文学・経済・芸術の分野に関する大量の書籍が置いてある。日本の翻訳本も村上春樹を中心として書店の一角を占めていた。他に注目すべき点としてあげられるのは、二〇一二年に初めてノーベル文学賞を受賞した“莫言”の本がまだまだ平積みとなっていたことであろう。

次に紹介するのは“尹氏鶏汁湯包”という小籠包の店である。お世辞にもきれいとは言えない店構えの食堂であるが、ここでは一二元という低価格で非常においしい小籠包を一蒸籠、八個食べることができる。サイズも大きく、一人一つ食べるのは量が多いようであった。また、この店ではラーメンなどを食べることもでき、これらもまた美味である。

追記

日々日記を書くのは意外と大変なようである。筆者の今日という日は、前日の担当のT氏に日記を書く手助けをするところから始まった。



四日目

相手に伝わった ときの嬉しさ

会話、総合、総統府見学

今日は中国語の授業が本格的に始まって二日目である。私達の朝は、今日も一階の食堂に下りていくところから始まった。食券をホテルの方に渡して「早上好」と挨拶する。中国風のお粥や油条などを味わい、八時から早速授業が始まった。八時から九時五〇分は会話を中心に学ぶ授業、一〇時一〇分から一二時までは文法や読み書きも含め総合的に学ぶ授業がある。会話を中心に学ぶ授業では、今日からテキストの本文に入った。この授業では、テキストの重要事項の解説のあとに、実際に身近な例に関して言い回しの練習をすることが重視される。強調の仕方など、文法の細かなところまで学ぶことができ、

予習・復習は大変であるものの、とても面白い。これに続いて、総合的に中国語を学ぶ授業では、配布されたテキストをもとに、昨日学んだ文法事項の練習問題の解説が行われた。この練習問題は、宿題として出されていたもので、皆一生懸命に取り組んできていた。今日の授業では、賛成派・反対派に分かれての現代の家族問題に関するディベートも取り入れられた。テキストで習ったり、自分で調べたりした単語を実際に使うことで語彙を定着させる大切さを実感した。これからは友達と単語の練習を頑張っていきたいと思う。

お昼は、南京大学の食堂カードを利用して一階の食堂で食べることができる。私はご飯とトマトスープ、大根の煮つけを食べた。中国では夏でもあまり冷たいものを飲まないと聞いていたが、確かに食堂でみる飲み物やスープに冷たいものはない。実際にこの習慣に従って生活してみると、お腹を冷やすことなく健康に過ごせているように思う。

今日の午後のプログラムは二三時半から始まった。バスに揺られること約三〇分、観光客の姿が目立つ総統府に到着した。バスから降りると南京の強い日差しに思わず目がくらむ。学生用のチケットが配られる間、私は門に設置された看板を見て気が付いた。中国語、英語とともに、日本語による案内がなされていたのだ。中国語の簡体字が街並みの看板に溢れる中、久々に見た日本語の文字であった。

大きな門を奥へ進むと、首都が北京に移るまでの間の総統府の様子を詳しく紹介する展示品や、実際に使われていた部屋などが並んでいた。展示品の説

明書きの中国語はまだまだ高度であり、それだけで理解することは出来なかった。しかしながら、林則徐や李鴻章など、歴史で学んだ人物が登場したり、午前中の授業で読み方を学んだばかりの字を見かけたりすると、とても嬉しく感じた。この総統府の中にはお土産や本を売るお店もあり、毛沢東の語録カード・トランプや、司馬遷の『史記』など、中国らしい一面を垣間見ることができた。

夕方に帰宅すると、私は何人かの友人とともに洗濯に行くことにした。フロントの係の方に中国語でものを尋ねるのも、実際にサマースクールに来ることはじめてできることの一つである。身振り手振りを交えながらも、相手に伝わったときの嬉しさは格別である。これから、身近なお店の中国の方にも積極的に話しかけられるようにしたい。

本日の午後のプログラムのもう一つのメインイベントは、引率してくださっている刈間教授による特別講座であった。「現代中国映画の変遷」と題して、中国各地の映画事情の変遷を中心に、台湾や韓国、日本の映画との関わりなどが説明され、大変興味深い内容であった。実際の映画の動画による紹介もあり、映画が如何に時代の特徴を反映するものなのかを実感することができた。私が最も印象に残ったのは、まさに今日放映されているCCTVのドラマの番組を分析し、中国や日本の文化上の特色を考えると、この例ではドラマを通じて一つの視点を得たが、私も語学を学びつつ、細やかにアンテナを張り巡らし、南京にすることでこそ学べることが大切になっていきたいと思います。



五日目

太面白い了！

会話、総合、作文 南大生との交流

今日の起床は六時半である。朝食を食べに行くと、皆の「早上好」の声が心なしか小さい。前日の授業と予習で若干寝不足のようであった。セルフサービスの朝食で毎日必ずお粥が置いてあるのは、暑い南方の中国の習慣であろうか。

さて、一昨日から始まった中国語の授業だが、今日で三日目。昨日と同様今日も八時から听说の授業である。Aクラスでは宿題で出された「日本と中国の比較」を先生がクラスのめいめいにあて、各自が発表した。その中には、「中国では日本よりもハーゲンダッツの値段が高い」という、実際に南京のスーパーで見た、意外な比較を発表した者もいた。関税と嗜好品への税が中国は高いという説明を先生から聞き、成程と思うと同時にそれがすぐに思いつかなかったのは勉強不足である。しかしこのように体験してみると、経済の授業を座学で聞くよりも断然印象に残るものである。

続いて二〇分の休憩をはさみ、総合の授業が一〇時一〇分から始まる。Aクラスでの先生は日本語が流暢で、太ったを「太面白い」という表現をなさる。それがあまりに自然であるので、ついつい聞き流してしまうのだが、中国語をかなり聞き取れるようになった、と感じるのは実は錯覚なのかもしれない。そうはいっても、授業中に多く使用される単語、例えば「句子」や「程度」などは随分聞き取れるようになったのは事実である。

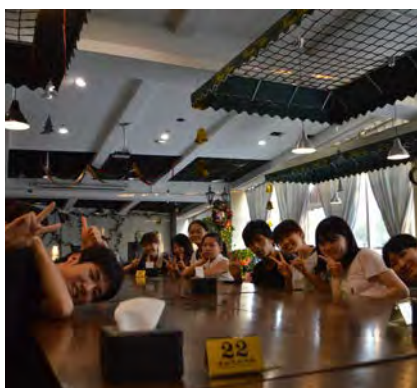
さて、お待ちかねの昼食はいつもの宿舎の中にある食堂で食べた。毎日少しずつメニューが変わっているのか、一元のおかずコーナーには一見生姜焼き

なのだが、実は豆腐、というおかずがあった。ここ二日間より奮発して四元コーナーのおかずを取り食べてみると、じゃがいもと長芋の炒め物のようだった。ご飯と合わせて四・五元の食事である。

午後の授業は一四時までのため、一旦部屋に戻って午前中に出された文法の宿題をやったり、洗濯をしたりする自由時間だが、各自いかにこの時間を有効に使えるかが次の日一日が有意義になるかの勝負である。

初めての写作の授業が一四時から始まった。昼寝をしてきた学生もあり、教室は眠たい雰囲気になっていった。日本人学生が中国語で書いた日記を配られ、それをしばらく黙読するように言われた後、先生は音読をする人を募ったが、皆の反応が薄い。ただでさえ眠たい時間なのだからしょうがない。四、五日分の日記で書かれていることについて、中国文化の話も含め、先生から説明を受ける。印象強かったのは一人つ子政策についての解説で、もちろん日本でも地理の授業では習ったが、中国現地で説明を受けると、問題は切迫しているのだということが感じられた。その後、中国に来てから何があったかについて各自が書き、提出し、先生に添削していただいた。やはり自分で文章を書いてみると、実際にどのように文法を運用するのがまだ身についていないことを実感する。また、中国語は表現が非常に豊富な言語である。このサマースクール中では難しいかもしれないが、文章に色彩がつけられるようになるまで中国語のレベルを上げたいものである。

そして授業が終わると、中国の学生との交流が行



われた。バスに乗り、バスの中でも中国語と英語を
 ごちゃまぜにしながら様々な話をしたが、やはり日
 本アニメは人気のようである。自分がそれを観たこ
 とがなかったのが残念であった。日本語学科の学生
 は非常に日本語が流暢だったため、日本語で話す方
 が楽であった。四〇分ほどすると、南京大学の大き
 いキャンパスに到着し、少しキャンパス見学をした
 後、キャンパス内にある音乐咖啡というお店で食事
 をした。今回の交流に参加した中国の学生はほとん
 どが同年代の女性で、東大の女子学生と一緒に話し
 ている時間が多かったため、多くの男子学生は話し
 かけづらかったようである。アメリカに留学してい
 て夏休みで実家に帰ってきている、という中国学生
 生や、この秋から京都へ留学するという中国人学生
 もおり、国際化が進んでいるということを肌で感じ
 た一日であった。

六日目

愛情公寓

会話、総合、講義 太極拳

今日は金曜日、今日でいったん授業は小休止である。最近みんな朝が起きられなくなっているようなのでいいタイミングである。

朝食では今日も相変わらず西瓜が人気であった。七時半ごろにやってくるとうもないので注意した方がいい。

一限目の口語課、私たちA組担任の姜先生は教科書の内容に入る前に、今日はある中国のテレビドラマを見せてくれた。「愛情公寓」という上海の若者の生活を描いたコメディードラマである。ドラマの会話はスピードが速い上に、流れるような発音で、中国語字幕があればまったく意味不明であったであろう。先生はやはり私たちのために調節して話してくれていたのだということが分かった。ちなみにこのドラマは部屋のテレビでもやっていて、先生曰くアメリカの「Friends」というドラマのパクリらしい。

ところで、昼食をとったあとみんな口々に昼寝をするというので少し奇妙に思っていたら、鄧先生からのメールで「昼寝をする」とのこと、なにやら中国では昼寝の習慣があるらしく、それにみんな素直に従っていたのであった。同部屋のNは昼寝をして調子が良くなったと言っていた。やはり中国式の生活には合っているのだろう。（ちなみに私はiPadでゲームをして無理矢理テンションを上げた）。

午後は南京の歴史についての講座をきいた。高校時代世界史をやっていた人なら知っていることが多かったようだが、単語のレベルが上がっていたので

あまりみんな理解できなかったようだ。普段の授業のとき先生は単語の難易度も考えて話してくれていたのであろう。やはり私たちの中国語はまだまだである。

ここ最近気温が四〇度前後まで上がることが多く、熱中症の恐れがあるということで明日予定されていた中山陵の見学は中止、一日休みとなったこともあり、授業が終わると心なしかみんな解放されたような様子だった。

地下の洗濯ができるところのそばに卓球台があるが、今日の夕食後、Fら四人はこちらで買ったラケットで卓球をしたようである。ラケット二本とボールのセットで九、九元と非常に安いものだが、さすがに作りが悪くペラペラである。しかし太極拳以外では久々の運動ということで、深夜の高校生のように騒いで楽しんでた。たまにはこういうのも悪くない。三週間のプログラムではあるが、最終週は観光や試験が多いので、中国語の授業はここが折り返し地点である。気分一新して後半の授業に臨むためにも週末はリフレッシュしようと思う。



七日目

南京スタイル

休暇

今日は七日目である。

本来なら中山陵を見学する予定だったが、みんな疲れているということ、日中の気温が四〇度を超えるという予報が出ていることから、熱中症の危険性があるため中止になり、急遽休日となった。休日の様子を雑多に書いていこうと思う。

筆者は連日の慣れない生活のため疲れていたのでも午前中を丸々睡眠に充てたが、中には長江を見学しに行った元気な同学もいた。船を渡す場所だったらしく対岸が見えるような比較的幅がせまい場所であつたが、それでもやはり日本の川と比べるとかなり大きいようだ。

ここで、こちらでの普段の生活をすこし伝えようと思う。たとえば洗濯、コイン式の洗濯機があり、私は今日初めて洗濯をした。カウンターにて三元で

コインを購入した後、挿入口に入れたが動かなかった。理由は挿入口に一元玉が詰まっていたことによるもので、近くにあつたハンガーをつつこんだらなんと五元も出てきて、得をした上に洗濯をすることができた。

その洗濯の直後、二人してカードキーを部屋においてきてしまい、カウンターに行つて開けてもらうことにした。部屋を空けるおばさんにすごい勢いでのしられたが、ものすごい勢いだつたのでまったく聞き取れなかつた。せめて聞き取れるようにのしつてほしいものである。

不自由することも多々あるが、日々その不自由と戦つていくことで中国の生活に慣れていつているのを実感する。

ここで、すこし面白いと思つたことを二つ紹介しよう。

一つは今日の昼過ぎ、ホテルの目の前の店に行つた際、前に止まっているバイクに日本の漫画のキャラクターのストラップがぶら下がつていた。日本文化の浸透が垣間見える光景であつた。

もう一つは、いつも使っているトイレの話である。日本でも「もう一歩前に」というような標語は掲げてあるがそれを紹介しよう。「文明从这里开始」（文明はここから始まる）、「向前一小步文明一大步」（小さな一歩で文明が大きく進む）、どうだろうか。筆者はなかなかにおもしろい表現を使っていると感じた。

休日も勉強をする者はいる。中国にいるのだから教科書を使わずとも中国語の勉強はできるのだ。た

とえば、今日の昼過ぎに放送していたテレビのドキュメンタリー番組、警察が犯人を逮捕するまでの一部始終をまとめたものであつたが同じ表現が何度も繰り返されていた。たとえば「zhengjiu」という音を聞き取りそれを調べると「証拠」（証拠）という単語が出てくる。それ以降何度も出てくる「証拠」を聞き取ることですニングの絶好の練習になる。こうやって生きた文章から勉強をできるのも中国滞在の特長であろう。

夕方は同学たちと古本屋へ向かつた。古本屋では筆者は『資治通鑑』と『史記』、『西遊記』を購入した。同学の中には中国の小説に興味を持つていて老舍や巴金の小説を購入するものもいた。

晩御飯は同学たちとカエルを食べた。カエル料理と聞いてみな身構えていたが細切れにされた肉なので抵抗なく口に運ぶことができた。味もなかなか美味であつた。骨が多く食べづらかつたが鶏肉のような食感であつた。

その帰り道、何人かの同学たちは上裸で帰路に就いた。彼らの名譽のために付け加えると、南京では非常に暑い上裸で街中を歩く姿をよく見かける。我々はこれを「南京スタイル」と称している。「郷に入りては郷に従え」の精神である。

明日は揚州見学である。今日はみな早めに寝るにとだろう。



八日目

冬来りなば 春遠からじ

揚州観光

南京八日目は五時半に始まった。家の事情で急遽帰国することになったIさんを送り出した。ちなみに、筆者はそれを知らず心地よく七時まで寝ていた。その後、それを知らされたとき、すごく寂しかった。朝御飯は毎日のようにホテルの食堂で食べていた。南京大学の学生によると、油揚げはそのまま食べず豆乳もしくはお粥と食べると美味しいと言われたので、試してみた。砂糖入りの豆乳と油揚げのマッティングが最高だった。朝御飯のバラエティーがあまりなくてそろそろ飽きるのではないかと思った。

八時に集合してバスに揺られながら揚州に向かった。昨日は中山陵を見学できなかったもので、皆は今日の揚州見学を楽しみにしていたようだ。二時間後、揚州八怪記念館に到着した。揚州八怪とは清時代に揚州を中心に活躍した文人画家グループのことである。花鳥画を得意として、四君子と言われる梅・蘭・竹・菊を好んで画いた。その画風は個性的であったため、沈滞した中国画壇に強い影響を与えたという(Wikipediaの一部を参考にした)。

次に我々は大明寺に向かった。日本へ仏法や戒律を伝えた鑑真がこの寺の住職だったことで知られている寺院である。その中には鑑真記念堂もあった。隣には栖霞塔があり、筆者と同学五人は二〇元を払って昇った。最高階の九階には揚州を三六〇度見渡すことができた。降りは段差を数えながら降りてきた。三人が手伝って三〇九段と数えられたが、管理員に聞いたら、実は三二一段あった。

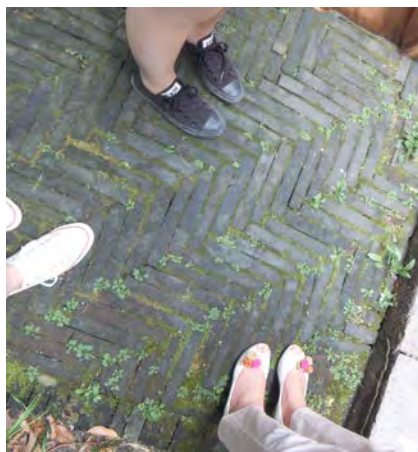
昼御飯は高級感のあるレストランで食事した。先生によると中国では団体の食事は普通には量が少な

いが、なぜか今回は量が食べきれないほどあった。筆者のテーブルはカメラマンのMくんの貢献もあって食べることができた。

そのあと、个園を見学した。竹がまっすぐに生えていて葉っぱが下向きに生えていることが「个」という字に似ていることから、个園と名付けられたという。个園には四季別にテーマが決められている。例えば、春には青竹がたくさん植えられている。夏は池と動物の形をしている石で表されている。秋は岩山の迷路、冬は岩でできた百体の獅子(実際の頭数は未確認)で、春の風景が少し見えた。それは、「冬が来たら春遠からず」ということを表している。

その建物を出れば、裏には昔風の町並が広がっている。商店街になっていて、皆はお土産を買っていた。その中で日本でも売ってそうなものもあった。値段を訪ねてみると一〇元(二六〇円程度)と比較的に安かった。中国の人件費の安さを目の当たりにすることができた。

帰りのバスの中で鄧先生から牛皮糖を頂いた。お蔭で頭痛になっていた筆者の隣に座っていたS君が回復した。筆者もこれを食べて残りの期間を乗り切ろうと思った。



九日目

ソーセージと リゾート

会話、総合、企業見学

今日はいつもより早い六時に起床し、七時に朝食を食べに行った。朝食は毎回だいたい同じ料理が並ぶバイキングであるが、一週間も経つとみなそれぞれお気に入りの食べ物ができ、毎朝それを食べるのを楽しみにしている人も多いようだ。

普段どおり八時からリスニング、会話重視の授業が始まった。Bクラスでは、ほぼ毎回クラスの生徒で二人組を作って教科書の内容に沿った会話を作ってくるという課題が与えられる。そのあとには文章の読解の授業。こちらも毎回出される課題が多く、そのうえとても難しい。しかし、中国語の語感を学ぶことを目的としており今後中国語にふれるにあたってとても役立ちそうな内容だ。

予習や復習の量も増えて最近では勉強に追われている生徒が増えてきているように思われる。中国の風習に従い、昼寝をする時間を確保するために普段は少し昼休みは長めなのだが、今日は集合時間が一三時半とやることで少し昼休みは短めであった。

集合したのちバスに乗った。バスでは先生が地図を片手に運転手さんに指示を出しており、「往右拐、向左拐（右へ曲がって、左に曲がって）」といった言葉が飛び交っていた。一時間程度で目的地に到着。中国に来てから移動はほとんどバスで行っているが、以前とは違って一時間程度だとあまり長いと感じなくなってきた気がする。

さて、まずはじめに南京雨潤食品有限公司という会社を見学させてもらった。南京雨潤食品有限公司は雨潤集団の一つの会社で、はじめに会社の説明を受け、ソーセージの加工工程を見学した。室内には

豊富な種類のソーセージも展示されていた。

その後雨潤集団の建物にバスで移動した。とても綺麗で豪華な建物であり清潔感があった。金色の扉を開けた先には大きなスクリーンを完備した部屋があらわれた。雨潤グループの映像を見た。今日は、事前にソーセージの加工工場を見学すると知らされていただけだったので、その規模の大きさに驚いた生徒も多かったようだ。雨潤グループは食肉加工だけでなく、リゾート開発なども行う大企業であった。一〇万人以上の従業員、二〇〇以上の子会社を持っているらしい。映像を見終わったのち雨潤グループが開発を行っているリゾートや、建設予定の建物、建設した建物などの模型が置かれている部屋に案内され、しばし見学した。どこを見ても豪華で綺麗な会社であった。

会社の案内はすべて社員さんに中国語でももらったのだが、みなほとんど聞き取れなかったようだ。授業中に先生の話聞き取るのはできても、実際に授業と関係のないところで聞く中国語はとても聞きづらい。私自身もそうであったが、これまで必死で現地の人々の言葉を聞き取ろうとして来たため、今回は特に集中ができてしまったのかもしれない。

夕立に見舞われながらも夕方ごろに宿舍にたどりついた。今日はここで解散となり、各自で自由に食事をとった。

サマースクールもとうとう二週目に入った。残すところあと一二日である。



一〇日目

中国文化の オンパレード

会話、総合、中国書画

南京一〇日目、このメンバーでの生活も折り返し地点を迎えつつある。本日の起床も六時半、素早く身支度を整え西瓜確保のために七時に朝食へと向かう。

午前中は恒例の汉语听说と総合汉语の授業である。

Aクラスでは昨日の工場見学の感想を発表したが、男性陣は経済状況について、一方で女性陣はより直観的な、従業員の美しさや会社で用いられていた流暢な英語について言及しており、両者の着眼点の間に顕著な違いがみられたことがささやかな驚きであった。と同時に、先生にも指摘されたが、知らぬ間に先週よりも授業の内容が格段に聞き取れるようになっていたのを改めて実感する授業でもあった。授業中、中国のテレビについて先生が熱く語る場面があった。中国のチャンネルは日本と違なり、数百個ある。中でも中国の連続テレビ小説は日本と比べて長く、一日に三、四話を連続して連日上映するようである。せっかくなのでリスニング力を高める意味も込め、部屋に戻ったらTVをつけてみようと思う。

午後は一転して中国文化のオンパレードであった。三時間目は 中国の印鑑を彫る书法与篆刻の授業が行われた。

悪戦苦闘しながらも、皆思い思いの図や漢字を無事彫り終えることができたようだ。堅い石に細かな模様を彫りこんでいく作業は想像以上に集中力と力を要するものであり、一時間もすると指先にタコができ始めた。にぎやかだった授業開始時と対照的に

授業中は皆彫刻に没頭しており、石を彫るかりかりとした音だけがしばらく教室中に響きわたっていた。掘り終えて周囲を見渡すと、苗字や自分の干支の図を描く人が多い様子である。完成後の皆の笑顔は特別さわやかであった。

彫刻を終えてホッとするのも束の間、四時間目は鄧先生に昆劇について学んだ。昆劇は中国で現存する最も古い演劇であり、世界無形文化遺産に登録されている。一七日にある昆劇鑑賞の予習の意味を込めて、今日は昆劇の最高傑作とされる『牡丹亭』の一場面、「遊園」を鑑賞した。シンプルな舞台の上で身ぶりや手ぶり、歌、そして美しい衣装を用い、役者によって物語が鮮やかに繰り広げられていく様子は実に壮観であった。例えば衣装の魅せ方、身のこなし方など、日本の伝統的なお能や歌舞伎とも共通する特徴がいくつも見られ、中国と日本の文化の近さというものを改めて感じる二時間であった。

授業終盤、王先生と一時日本に帰国していたIさんがめでたく到着した。二人を出迎えたのち、皆で昆劇を合唱し、楽しく授業が終わった。

昨日、一昨日に比べ今日の気温は若干低めであったため、授業後夕飯を食べながら散歩をしてきた。寮から徒歩一〇分前後のところに手作りチョココレートのお店があったため興味本位で入ってみた。

中国では旧暦が用いられているため、今日、八月一三日がちょうど七夕であるらしい。中国では日本のバレンタインデーと同様の行事が七夕に行われるらしく、お店の中にはバレンタイン用のチョココレートであふれていた。店の中にはドラえもんをはじめ



日本のキャラクターを象ったお菓子も数多く陳列されており、定員さんとのジャパントークでしばし盛り上がった。かわいらしいチョコレート達に興奮し、思わずチョコレートを購入してしまった。

連日の中華料理に疲弊したおなかを休めるため、夕飯には韓国料理を食べに行った。

以前一度訪れた店なのだが、定員さんが私達のことを記憶してくださっていたようで、にこにこと出迎えてくれた。久々に食べるビビンバのあつさりとした美味しさと親切な接客に気持ちもお腹も満たされ、夕焼けの中のんびりと帰途についた。街中に出た先々で出会う人々と交わす中国語での会話が、徐々にではあるが実のあるものになっていくのを実感できる小旅行であった。

明日は一日目。いよいよ後半戦である。

一二日目

疯了嗎？

会話、総合、夫子廟見学

日常をタイムスケジュールにしたがって書くのもいいが、それは別の生徒が書いていることと思うので、今回は南京の生活について思ったこと、最近の学生間で流行っていること、中国の書店について、本日訪れた孔子廟について書くと思う。

今回のサマースクールでの南京の住環境、勉強環境ははっきりいって素晴らしい。われわれは実は南京大学には住んでいない。隣接したホテルに住んでいるのである。何が素晴らしいか。まず、部屋のきれいさの質がそもそも高い。これまで何回か中国に泊まったことがあるがその中でも清潔さにおいてトップレベルである。これ以上の清潔さが欲しければヒルトンにでも泊まるしかないのではないか。さらに日に一度掃除のおばちゃんが掃除をしてくれて、バスタオル等も交換してくれる。また、何か要望があったとき、例えばシャワーにカーテンが欲しいとか、空調が壊れたとかというときに、すぐに対応してくれる（これは先生がたの迅速な対応にもよるが）。そして、教室までにかかる時間は、五分からない程度である。素晴らしい！

南京大学での中国語の授業もはや一週が明け、同学たちもほぼ中国語だけの授業にも慣れてきた。慣れにはいい部分も悪い部分もある。マンネリ化してしまうとよくない。そこで最近われわれ（特にBクラス）は新しい勉強法を編み出した。それは、新しい単語を叫ぶことである。休み時間が来るたびに単語を叫びまくる。特に人気のある単語は按时（時間通り）という意味の単語である。この単語の最初の音は「アン」という音で、しかも四声という高い声

から急激に下へと下がる音なので実に叫びやすい。これを叫んでいたら先生に「疯了嗎？（狂ったか）」といわれてしまったが、記憶するためだと説明すると先生も納得してくださり、最後には「再见！（また会いましょう）」と一緒に叫んでくださった。

午後は夫子廟を参観した。

これは孔子を祀っているたてものであって、南京の一大観光地となっている。ここでは三グループにわかれ、先生が一人ずつそこについて、二時間ほど観光する運びとなった。お土産屋、食べ物屋などたくさんあって、とても賑やかである。

私たちのグループは一時間ほどお土産屋さんをまわったのち、夫子廟を見に行った。そこでは孔子の絵が飾っており、老子との対話を記した、七〇〇年ほど前の石碑などがあった。

宗教的な場所柄のせいか、ほかの観光地よりも厳粛な趣であった。

夜は、王前先生がスイカをくださったので、みんなでスイカパーティーを開催した。

I君の部屋で開催したので、結構込み合ったが、みんななかなか楽しんだ。



一二日目

中国語漬けの 一日

会話、総合、作文 南大生との交流

今日は木曜日なので、中国語の授業は通常行われる汉语听说と総合汉语に加えて、午後には写作、つまり作文の授業も行われる。ひたすら中国語漬けになる一日である。

また、今日は初日からずっと私達の生活をサポートしてくださった鄧先生が帰られる日である。鄧先生には本当にお世話になった。実際に、筆者のルームメイトが初日にブレーカーを落としてしまったときにも、管理人の方と話をしてくださったり、サマースクール参加者全員の健康を気遣ってくださったりと、どんな小さなことでも気になったことはすぐに相談できる先生だった。そのため、サマースクール参加者で鄧先生に感謝の気持ちを込めてメッセージカードを手渡した。また、この場を借りてお礼を申し上げたい。今まで本当にありがとうございました。さて、三コマ連続で中国語の学習をした後には、中国の学生との交流が待っている。今日は地下鉄に乗って新街口という場所へ出かけた。

今日利用した地下鉄も一号線である。これは二〇〇五年に開通した地下鉄で、駅舎も車両も非常に綺麗であった。興味深かったのは切符。日本では切符と言うと紙製のものを思い浮かべるが、中国での切符は青いプラスチック製で、だいたい一元玉と同じくらいの大きさをしている。この切符は中にICチップが埋め込まれており、PASMOと同じように改札にタッチすることで通ることができる。また、改札を出るときには、改札機に切符を投入する。日本の地下鉄を使い慣れている身からしてみると、とても新鮮な体験であった。

新街口は、東京という新宿のような雰囲気のある場所である。大きなショッピングモールや数々の専門店が軒を連ねている。ここでは、私達は中国映画のDVDを扱う店に行った後に、四つのグループに分かれて行動した。DVDの店は先週に刈間先生の授業で教えていただいた場所である。落ち着いた雰囲気のお店には中国のCDやDVDが所狭しと並べられていた。日本人の私達には知らない映画が多くあったが、中国の学生におすすめの映画を教えてもらったりするなど、皆が映画や音楽について話を交わせる姿が見られた。

その後はグループ行動である。筆者のグループはまず夕食に出かけた。夕食としていただいたのは、お粥。朝食でもおなじみのメニューである。中国では、日常的におかゆを主食として食べる習慣があるという。本当にさまざまなお粥がメニューに並んでおり、どれも美味しそうに感じられた。

その後に、新しくオープンした書店を覗いた。この書店は、ガラス張りの階段の下に本が積まれていたり、カフェが併設されていたりと、おしゃれな雰囲気の書店であった。本を探していた筆者は中国人の店員に場所を尋ねたことから三人の店員と会話を交わした。聞き取るのは難しいが、それでも上達はしつつあると感じた瞬間だった。

思い返せば今日は八月十五日、終戦記念日である。そんな日であっても、日本人と中国人が普通に会話をすることができる。このような関係を今後とも発展させていきたいものだと考えつつ、今日のところはここで筆を置くこととする。



一三日目

カオスの幕開け

会話、総合、講義 太極拳

サマースクールの日誌は一日ごと一人が担当して書くことになっているのだが、僕の担当の番は一日目で八月一六日、第二週目の金曜日であった。あすは夜に昆劇の観劇だけがノルマであるので、毎日が予定でびっしりであった僕らにとって、あす、あさっては体を休める貴重な休日である。今日は鄧先生が帰省してから一日目であった。サマースクール当初と比べて、最近だんだん起きるのが遅くなってきた。こちらでの生活の慣れのためだと思われるが、そんな毎日、昨日までは毎朝、僕らが食堂に行くと確かに鄧先生がいた。サマースクールの前半、僕らを温かく見守り続けてくれた鄧先生がさびしく思われた。

本日はいつも通り八時から听说汉语の授業であったが、僕らのBクラスでは邵先生に沙琪吗というお菓子をお願いした。これは徐福記という中国の菓子企業のお菓子であり、徐福記はS君の名前の中国語読みと声調が違うだけで読みが似ていることにかこつけている。沙琪吗は米菓子のようなもので甘くておいしかった。

昼食をとったのち、昼休みに四人で卓球をした。ただ卓球をしただけなら、卓球は何回もしているし、先に日誌に記録されているので、ここに書く必要はないと咎められてしまうのだが、今日はいつもととは違った。僕らが卓球にいそしんでいると、ホテルの従業員の方であろうか、「こんにちは、こんにちは、こんにちは！」と明るく声をかけにきたおじさんがいて一緒に卓球をした。現地の人と卓球するのは初めてだったので、僕らはいささか興奮していた。

中国では卓球が盛んであるだけあって、おじさんは卓球がうまかった。言葉を交わすことはほとんどなかったけれど、大変楽しむことができた。

午後は洪先生による中国の経済についての講義があった。洪先生は中国語と英語を同じくらいの割合で使って説明してくれたので、南京の歴史についての講義と比べて皆理解が追い付いているように思えた。僕は経済についての知識に乏しい上に、英語も中国語と同等に未熟であるために听不懂な状況であったので、残念であったが、授業が終わった後、次の総合汉语の授業の時間に割り込むまでに質問が続き、拍手で講義が締めくくられたことから授業の理解度が高かったことが伺えるだろう。

夕食を済ませた後は王先生とIさんがお土産として買ってきてくれたお菓子を持ち寄ってささいなパーティをした。八時から南京で行われている（刈間先生が現場にいらっしやるという噂も聞いた）アジアユースゲームの開会式の中継をテレビで見ながらである。みんなのアイドルことN君とS君の撮影会が行われる、男子同士、女子同士で、二人でリンクキラーが始まるなどカオスの幕開けを迎えているところで、僕は筆を置きたいと思う。



一四日目

えっちら おっちら

中山陵見学、昆劇鑑賞

一七日土曜日。本日全体で動くのは、夜に昆劇を見に行くだけであり、自由時間が多かった。筆者は、先週熱中症の危険を恐れ、みなで訪れることができなくなった中山陵と、侵華日軍南京大虐殺遇難同胞紀念館（通称…南京大虐殺紀念館）に行くことを考えていた。しかし、当日の朝になってやっと、実際に行くことと行くメンバーが確定した。また、ほかの多くの学生は、来週南京大学の学生との交流の一貫としてこちらの有志の学生が二〇日に催すお茶会の準備を行った。

筆者は、大学の自転車部旅行班に所属している。そのため、いつも自転車があればどれだけ快適かと考えてしまう。しかし、南京ではバスと地下鉄が充実しているため、移動には困らない。大通りに目をやると必ずバスが目に入るといっても過言ではないほどバスが走っている。そのため時刻表はないが、ほとんど待つことなくバスに乗れる。地下鉄も、現在南京で走っているのは二本だが、目下工事中であり、更に充実していくであろう。バスは一律二元。地下鉄も我々が移動する限りでは、大体二元で済むであろう。今回の行程も、バスと地下鉄を利用した。どちらも一度ずつ経験済みであったが、やはり乗り物に乗るのは楽しい。とりわけ、暑いこの季節には……。

出発。まずは孫文のお墓、中山陵に向かった。中山陵はとても暑く、階段を登ると汗が吹き出たが、元気な同学は南京スタイルで駆け上がったりもしていた。静かな林道を歩いて、素晴らしい景観にも出会えてよかった。印象的だったのは、——中山陵と

の直接的な関係は皆無だが——途中で出会ったおばさんである。同学のFさんがオートバイに乗った彼女に話しかけられた。筆者が「見た」ところ、オートバイに白米を積みすぎたために、緩やかな坂を登れなくなってしまう立ち往生している。押ししてくれと頼まれたので、えっちらおっちら押す。筆者は諸事情により途中で脱落したが、親切な同学たちは、往復二〇分ほどの道のりを押して差し上げた。無事にことが運んだようである。

再びバスに乗り、途中でお茶会の準備のためにホテルに戻る者と、そのまま南京大虐殺紀念館に向かう者に別れた。あまり時間がないと思われたので、南京大虐殺紀念館に向かったKさんと筆者は、昼食を西安駅のホットドッグ屋さんで簡単に済ませた。西安駅は非常に静かで、店員さんもあまり忙しそうにしていなかった。少し話をした。写真の中でKさんがかぶっている帽子は、中山陵で購入したもののだが、この店の店員さんにも気に入ってもらえたようだ。せっかく南京にいるのだから、このような機会を活かして中国語を磨いていきたいものである。

このあとの、南京大虐殺紀念館に関しては明日一九日に訪れる同学に託すことにする。

さて。南京に来て、筆者が訓練を受けているものは、中国語の他にもう一つ大きなものがある。卓球である。現地の方と、卓球を通して交流を図ろうと、同学であるSさんに指導してもらいながらJさんらと練習してきた。昨日も現地の方と校舎の地下で出会い交流の機会を持ったが、今回は南京大学の体育



館内にある卓球場にお邪魔した。筆者が行った時には、Sさんが既に社会人のグループと交流を図っていた。卓球場で現在仙林キャンパスに通う博士課程の学生と特に親しくなり、後日また交流する予定である。日本のアニメやゲームが好きなようであった。日本文化が海外でも人気を得ることが大変喜ばしいことだと改めて実感した。楽しさのあまり時間を忘れ、気づけば集合時間まで余裕がなかったため、夕飯はホテルの前の商店でパンを買って済ませた。本日は、南京に来てから最も食が乱れた日であった。本日のメインイベント、昆劇。発音が大きくずれていることもあり、聞き取るのは困難であった。左右に字幕（英訳付き）が表示されたモニターが設置されていたので、英文を追うことで内容を理解していた同学も多かったと思われる。一三日の鄧芳先生の授業で昆劇について学んでいたので、手の形や白袖などにも注目でき、今回の公演を十分楽しめたと思う。

明日も休日である。来週の授業や試験の準備もあるが、南京の人や街に触れる貴重な自由時間である。みなが健康で、有意義に過ごせることを切に願う。

一五日目

南京大虐殺とカラオケ

休暇

中国語サマースクールも二週間を終えた。本日は二度目の完全休日だ。同学たちは各々の趣向に従っておもいおもいの休日を過ごしたことであろう。昨日リハーサルをしたお茶会組は今日も夜から再度リハーサルを行うようである。昨日も夜中の四時近くまでミーティングを行っていたようだ。頑張り屋の同学に頭があらがない。火曜日のお茶会を南京大学の学生が楽しんでもくれるといいが……。

以下、筆者の今日一日をお送りする。

本日筆者が午前中出向いたのは南京大虐殺記念館（正式名称…侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館）。南京の中で特に行きたかった場所だ。最寄駅の雲錦路駅下車後、人の波に乗ってももの一分で記念館に到着した。記念館入口には行列ができており、八時半開館一〇時到着で入館者は二、〇〇〇人に至っていた。記念館というのでこぢんまりとした一戸建てを予想していたが、実際ははるかに大きくきれいで立派だった。敷地内の建造物、建物の風貌から館内に至るまでデザイン性が高く、ちょっとした美術館のようだ。屋外に置いてある石像にまでおどろおどろしいバックミュージックがつけられていた。

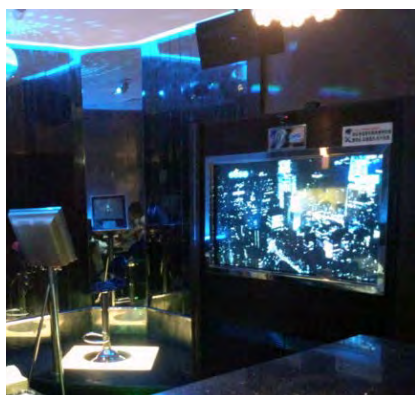
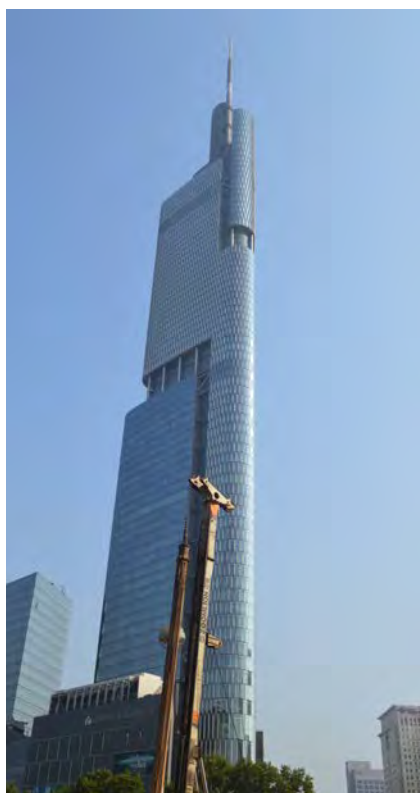
入館料は無料で、来館者は若者も多く小さな子供を連れた若いお母さんやカップルなどもいた。外国人も見かけられた。さっそく中に入る。今日は時間が限られていたので主要陳列ホールの一階しか見て回ることが出来なかった。ホールでは日中戦争開始から南京陥落、その後の六週間にわたる虐殺、海外慈善団体の功績、戦後の論争までが、日記や証言、写真などの証拠をもとに展示されている。一番記憶

に残ったのは被害者中国人やたまたま居合わせた外国人、日本兵の証言の数々だ。生々しい虐殺の描写はあまりに非現実的で想像するのが難しかった。多くの陳列コーナーで日本軍の残虐さにスポットが当てられており、今日の中国人の反日感情に合点がいった。展示の終盤にあった「許してもいい、しかし忘れてはいけない」（ジョン・ラーベ）という旨の記述は、日本人へ過去の出来事を学ぶことの責任と大切さを伝えているようにも思われた。

午後は、こっちに来てから出来た南京大学の友人二人と東京大学の同学五人でカラオケに行った。南京大学からは徒歩一五分ほどだ。大きくきれいな建物である。南京大学の学生（彼女は一年間アイコム生として東京大学に留学していた。）は日本のカラオケと差不多（ほとんど同じ）だと言っていたが、むしろ南京のカラオケは日本のそれよりもクオリティーは高いといっているだろう。まず、ロビーに入るとドアの開閉してくれる店員さん、ジュースをくれる店員さんに出迎えられる。ロビーは広く大きなソファがいくつもあつた。部屋までは店員さんが案内してくれる。

着いた部屋もこれまた豪華だ。まず東京の狭いカラオケの二倍以上の広さ、小さなステージとカウンター席付き。テレビの画面も大きく、廊下にあるトイレは紙もついており中国で見てきた中で空港の次にきれいだった。

そのクオリティーで四時間歌って一人二〇元ほどで済んだ。友人が前日から予約してくれていたおかげもあつてとても安く済みますことができた。終盤は



駒場の教科書に登場する某有名男性歌手の歌をみんなで歌って盛り上がった。カラオケ後は、北京ダック店で「南京の」北京ダック（なんでも北京のとは皮が違うらしい。）と一緒に食べた。

遊び中、会話は大部分中国語であったがこちらの語学力の未熟さゆえ意思疎通を図るのにはなかなか苦労する。南京に来たばかりのころよりは上達を感じたものの、簡単な会話さえ時間がかかる。向こうの友人は本当に親切で、何度もゆっくり繰り返し返してくれた。必死にこっちの言うことに耳を傾けてくれた。南大生と別れた後のエレベーターでも中国語での会話は続き、中国語脳に近づけている感じがうれしかった。残り少なくなってきた南京生活ではあるが中国人学生ともっと仲良くなって交友を継続していきたいと思う。

過去の軋轢を学ぶ一方で交友を深める。今日は意図せず大変意義深い一日となった。

一六日目

餐厅と勺子

会話、総合、太極拳

中国書画

中国語サマースクール授業最終日である今日は、とてもハードな一日であった。明日に予定されていた中国書画（書道と篆刻）の授業が、今日の十二時半からに変更されたのだ。担当の王新建先生が急遽出張することになったためである。これによって、普段は一二時から一四時までの二時間であった昼休みがたったの三〇分になってしまった。当然ながら、最終日の感慨にふける余裕などなく、筆者もこの記事を書く段になってようやく一息つき、このサマースクールを振り返っている。

自分たちの中国語上達の前途がいかに長い道のあるかを実感したエピソードを紹介したい。私たちの宿舎の目の間には売店やbar、餐厅（レストラン）が並んでいるのだが、特にその中で《老地方餐

厅》という餐厅は近くて味も良く、この二週間の間にすっかりメンバーのお気に入りになっている。ここで夕食を食べている時、隣の卓の白人男性に中国語で話しかけられた。男性の中国語がとても流暢であることにも驚いたのだが、私たちには男性の言っている内容がわからず、皆しどろもどろになってしまったのである。後から分かったのだが、この時男性は自分の卓の勺子（さじ。発音を日本語で表すと「しゃおず」）が足りないので、余っていたらくれないかと言っていたのだ。「勺子」という単語が分かっていたらば！自分たちの語彙の少なさと、うまく会話できなかったことへの悔しさを感じた。

さて、ここからが問題である。サマースクールも三週目に入り、私たちの中国語は少なからずBrushされたのだろうか。このサマースクールで授業を担当してくださっている先生の一人は、「私は授業中に中国語を話す時、日に日にスピードをあげているけど、気付いている？気付いてないなら、あなたたちの中国語を聞く能力は上がっているということよ（先生は授業中は常に中国語なので、筆者が訳した。）」と仰っていた。これが本当なら、このサマースクールに参加した成果の一つと言えるだろう。

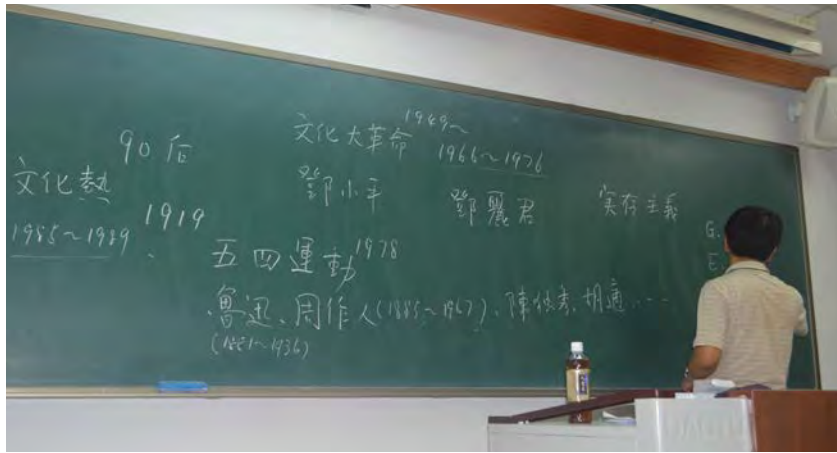
話を今日の出来事に戻したい。サマースクールの最終講義は慌ただしく終了した。ちなみに日程を変更して行われた中国書画の授業では、中国の書道を体験した。日本式の楷書の書道とはかなり字体が異なり、曲線と微妙に丸みを持った字体が特徴である。メンバーはそれぞれ、「福」の字と、さらに各自で選んだ二文字（筆者の選んだのは「朝霧」である）

を書いた。

そして、締めくくりとしてサマースクール後半から引率をしてくださっている王前先生による特別講義が行われた。講義のテーマは中国における最近三〇年の外国思想文化の受容である。質疑応答も含めて二時間という限られた時間であったが、中国の知識人層における思想の変化や西洋思想の需要の過程についての講義に始まり、後半は学生からの質問も取り上げられ、政治経済や日中関係にまで幅広く話を聞くことができた。

この二週間と少しの間、私たちは新しい環境の中で、自分の中国語がいかに拙いかに悩み、授業に取り組んできた。サマースクールも残すところあと明日の考試（テスト）と明後日から三日間に渡る廬山旅行を残すのみだ。二五日の早朝に私たちは帰国する。

Znating Journal 最終章に突入である。



一七日目

茶会、浴衣 目の保養

会話、総合

中国語サマースクール一七日目。今日は最終テストの日である。昨日は朝から晩の九時半まで授業が詰まっております、夜遅くまで試験勉強をしていた同学が多いようだ。みんな眠たそうな顔をしている。

一時間目は会話試験。僕たちのクラスでは、計画生育政策の是非について賛成方と反対方に分かれて討論を行うという試験であった。討論は黒板一杯に図や文字を埋め尽くしながら、終始笑顔溢れる楽しい雰囲気のもと行われた。全員が熱く意見を主張しているうちに、いつの間にか指定時間の一時間が過ぎていた。

それぞれのグループは多忙なスケジュールの中で打ち合わせが直前までもつれこんだ。それでも本番で素晴らしい団結力を見せたことは自信を持っていると思う。みんなありがとう！

その後、二時間目は読み書きの試験だった。形式はセンター試験のようで比較的簡単に思えた。二時間目のテストをもって今回のサマースクールの中国語学習は終わりを迎えた。個人的には「長いようで短い」ではなくて、「短すぎてあつという間」という気持ちであったが、皆の感想はどうだったのだろうか。

テスト終了の達成感を感じる間もなく、午後からは本日のもう一つのメインイベントである茶会が始まった。今回のサマースクールのメンバーには茶道部の人が多く、日本文化紹介も兼ねて南京の地で茶会を開くことになったのである。けれども「茶会を開く」と言うのは簡単だが、実際やるとなると大きな困難があった。それぞれのメンバーが習熟してい

る流派間の作法の違いから始まり、現地での茶碗の調達、言語上の問題などありとあらゆる問題があつて、心労を重ねた同学も多かった。三日前のリハーサルの段階でも手順が上手くいかないことが多く、最後まで調整が続けられた。けれども、今日の本番では先生方の協力も得つつ、かなり本格的なものとして成功裏に終えることができた。男性陣、女性陣とも浴衣がとても良く似合っていて、目の保養になった人も多いと思う。お客さんの方々にも満足していただけていたら嬉しい。

テストも茶会も終え、遂に残す予定は明日からの廬山観光を残すのみになった。

サマースクールも終わりに近づくにつれ、段々みんなの口から「帰りたくない」という声が聞かれるようになってきた。メンバーのみんなと過ごす日々もあと四日のみだ。日本に帰るとそれぞれが別々の日々を送ることになるが、これからも皆との交流を絶やさないようにしたいと切実に思う。

そんな感慨にふけりながら、今日のところは眠りにつくことにする。おやすみ。



一八日目

仙人洞からの 絶景

廬山観光

今日からいつもと違う日が始まる。昨日分の記事にある通り中国語の勉強がないのである。ではなにが始まるか、廬山観光である。その一日目をリポートしようと思う。いつもと違い起床は早い。なぜなら廬山に行くのに六時間かかるからである。多少の寝坊はあったものの無事出発した。

さて六時間何をしようか。筆者も含めて大体の同学は睡眠をとった。なにせ五、六時起きをしたのである。テストも終わり気にするのではない。しかし六時間は長い。結局筆者は最後の一時間を起きて過ごした。ここで中国の高速道路について気づいたことを述べていきたい。

中国の交通については過去の記事にもあるが日本

とはかなり違う。道路の渡り方や信号の違い、いつも走っているバスやタクシーなどである。しかしそれは南京大学周辺のことであって、都市と都市の大移動はあまりしてこなかった。今回約六〇〇キロという東京・大阪間以上の距離を移動するにあたり長時間高速道路に乗った。まず日本と同じところは、追い越し車線、走行車線と種類分けされていたり、サービスエリア（パーキングエリア）のような休憩所があったことである。違うところは、交通量の少なさである。都市部付近で高速に乗った時はまだまだ混雑していたが、一旦寝て途中のサービスエリアで起きた後の高速の交通量はうって変わって激減していた。数分に一回車を追い越すくらいであった。さすがに中国が広いとはいえず少し寂しすぎる交通量であった。これで儲かっているのだろうか。筆者は知る由もない。

また途中で橋脚の修理をしていたのか反対車線の車をこちらの車線の一本に通していて、この高速も中国の近年の発達に合わせて急造したものなのだろうかと思いを馳せた。さらに軍事車両専用道路のようなものもあり、軍事車両以外進入禁止と看板があり後に高速から外れて行った。日本では見ることはないであろう光景であった。

では本日のメインである廬山観光に移ろう。まず廬山について簡単に説明すると、廬山は最高一四二六メートルの岩洞と滝が多い山で、昔から避暑地として、新旧問わず著名人が訪れたことがある山として知られている。

今回訪れた場所は如琴湖周辺と仙人洞であった。

まず如琴湖だが、過去には白居易が周辺を訪れたことがあり、記念として建てられた庭園があった。庭園内部には記念館のようなものもあり、白居易が残した詩があった。

次に仙人洞であるが、仙人と名が付くだけあり、八人の仙人のうちの一人がいたという伝説があり、さらにかの Marshall Plan の Marshall が訪れたことがあるそうである。その仙人洞だがとにかく崖である。ところどころに飛び出した岩があり、地面に雑に STOP の黄線が引いてあるだけで柵もない危ないスポットが点在している。危ないとはいえ反対側に見える山々が一望でき、景色は素晴らしいと言える。

その後無事ホテルに着き近くの町を散策した。散策から帰るとホテルの入口がなぜか暗い。ガイドさんによれば停電したそう。みればホテルだけでなく周囲の建物のほとんどが真っ暗で、地区全体が停電したようである。皆懐中電灯を片手に右往左往しながらワイワイし、ロウソクを灯してと楽しそうである。その後王先生が買って下さったスイカを薄暗い中で切って食べたがとても美味しかった。そして無事停電も回復し、今日の一日を終えた。



一九日目

大雨の廬山

廬山観光

サマースクール一九日目。今日は廬山観光二日目である。

天候が悪いので、全員そろって雨よけカッパを買って、いざ出発！外は一面分厚い霧に覆われていて、一〇メートル先になると人がいるのもほとんど分からないくらいあたり一面真っ白だった。こんな天気で観光なんてできるのかと誰もが心の中で思っていただろう。

まずはじめに、植物園に向かった。バスで向かったのだが、バスの運転手が、濃い霧なのに制限速度を大幅にオーバーして走っていた。ここはやはり中国だなと感じてしまった。植物園では実際にはほとんど植物を見なかった。植物園に行くまでの道のりで林の中を通ったのでそれを植物といえればそれまでだが、展示用の植物と思われるものはハウスの中に

あるわずかなものだけで、緑豊かな公園という印象を受けた。ただ、唯一皆で見たものに、金銭松というものがある。これはその名の通り、とても高価な松だそう。一本三〇万円ほどするのだそう。確かにこの松は幹も太いし、枝も立派で見た目も壮観だが、この値段にはいささか驚いてしまう。

その後、廬山でも有名な三疊泉に向かった。この時気付いたのだが、廬山では、雨の日、どこでもカッパを売っている。しかもそのカッパが、すべて色違いなだけでつくりはすべて同じなのだ。いたるところで売ってくれるのはありがたいのだが、値段も場所によって全然違うし、品質もイマイチ。ゴミ袋で作ったような簡単な生地とつくりで、筆者は袋を開けた時にすでにカッパを破ってしまった。

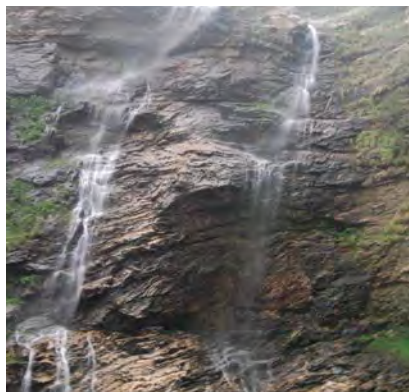
ところでこの滝は、三層に滝が見えるからこの名がつけられたのだそう。ロープウェイで滝の近くまで行き、そこから一四〇〇ほどの階段を下って滝のすぐ下まで来て滝を鑑賞した。何度も途中で引き返したいという思いを振り払い、自分に鞭を打ち続けた甲斐があったと思えるほどの壮観な眺めだった。本当にすぐそばで滝を見ることができてただただ迫力に圧倒されるだけだった。しかし、今日はあいにくの天気。霧と雨が混じり、おまけに大風も吹いていて、立っているだけでも体力がどんどん奪われた。この天気のせいで、三層の滝の一番上はかすんで見られなかった。さらに滝をよく見たら、風が強すぎるせいか、滝の水が滝つぼに落ちる前に霧になっていった。こんな滝は見たことがない。しかしこの場所の見どころは滝だけではない。一番てっぺん

は霧でかすんで見えないほどの大きな岩山のようなものの断面に、地層がむき出しになっているのだ。これほど大きな地層は日本のどこにあるのだろうかと思ってしまった。滝、および地層の鑑賞がすんだら今度は一四〇〇の階段を上らなければならない。行きよりも天気が悪くなっているし、今度は上りで、もう帰れないのではないのかと何度も絶望感を抱いた。まるでアリジゴクに入れられてしまったかのようだった。

休み休み進み、何とか地獄から這い上がった時にはなぜかレインコートの中もびしょ濡れで、髪もお風呂上がりのように濡れて、体が冷えてぶるぶる震えてしまっていた。そんな私たちに先生は気を遣ってくださり、ホテルで着替えてから昼食に行くことにした。服を着替えてさっぱりしたところで昼食に向かったが、昼食のレストランまでの道のりを歩いただけで髪はびしょびしょ、足元はぐちぐちよ、着替える前と全く変わらない状況になってしまっていた。

大雨のため、予定を大幅に削って、蒋介石とその夫人の別荘だけ見学することになった。蒋介石が会議に使っていた部屋や、毛沢東も泊まったことのある部屋なども見学して、歴史的人物に思いを馳せることができた。

一昨日までは南京大学で中国語漬けの日々を送っていた、昨日から今までの頑張りの打ち上げ気分が廬山観光に来たのだが、実際には廬山観光の方がハードであった。こんなハードスケジュールにしても私たちにいろいろ見せてくださるガイドさ



ん、先生方に本当に感謝の気持ちでいっぱいです！
非常感謝！謝謝！！

廬山に来て、南京との違いをいろいろ実感した。
廬山は昔の毛沢東などの有名人が避暑に来ていたこ
となどからもわかるように、南京と比べものになら
ないほど涼しい。山の中なので空気はずっときれい
だが、天気はとても変わりやすく、不安定であるこ
も思った。また、三食色々なところで食べること
で、その土地の食を知ることもできた。同じ中華料
理でも南京と廬山では全然違う。南京だけを見てい
ても南京を語ることはできない。南京を見て、廬山
も見ることによって初めて南京を知ることができ
るのだと感じた。日本のことだけを学んだところで日
本を知ったとは言えないのと同じことだ。広い視野
を持って知を求め続けることの大切さを感じた小旅
行だった。

二〇日目

車、炎上！

廬山観光

目を覚ますとバスは高速道路を軽快にとぼしていた。時刻は二三時四五分。廬山を出て約一時間が経過した。

空は快晴。昨日からの悪天候が嘘のような青空である。

しかし私たちはバスの中。あと五時間はバスの中だ。南京につくのは夜の七時を予定している。

ふと外を見ると道路上に黄色い何かが落ちていた。キツネの死体のように見えたが、段ボールが落ちていただけかもしれない。

午後二時をまわった。バスは高速を降りて一般道をひた走る。道は狭くはない。歩道はなく、路肩には赤みを帯びた土が露出している。道路にはところどころ凹凸があり、日本に比べると車内の揺れは激しいが、昨晩遅くまで起きていた者も多く、大半の

人間は眠っている。

道の両脇には時折さびれた集落が現れる。開いている店はほとんどないが、人は歩いているし、洗濯物も干してある。

そしてこの一般道では運転手の本領が発揮される。たとえどんなに道幅がせまかろうと、カーブに差しかかる地点であろうと、前からバイクが来ているように、クラクションを鳴らして前の車両をぐいぐい追い抜いて行く。廬山行き道中に関して言えば、反対車線を走っている時間のほうが長かったくらいである。

一四時四五分。バスは再び高速道路に乗った。

思えば中国に来てはや二〇日。今日の午前中は朱熹にまつわる地を訪れるなど、九江付近を観光したが、これをもって日程のほとんどが終了したことになる。早く日本に帰りたいという者も、まだ物足りないという者もいるが、私はどちらかというと前者である。

このブログの趣旨は、「見たことや聞いたこととなるべく客観的に描写する」ということであるが、ここからしばし主観一辺倒の文章をつづる。

今回中国で過ごした期間、様々な経験をする事ができたが、その中で最も実りのある瞬間はいつであったか。改めて考えなおしてみると、それはみんなで名所旧跡を観光していたときでも、懸命に予習に励んだ時間でも、授業を受けていた時でもない。私にとっては、現地の人々とほんの些細な会話を交わした瞬間こそが最も印象深いものであった。町や店をうろついていると、ふとした拍子に会話が始ま

ることがある。相手の言葉を理解するのも、自分の言いたいことを伝えるのもまだまだかなりの時間を要する。しかし彼らと言葉を交わしたその時間は、私の心に今も鮮明に残っている。私はほかの学生にくらべ、中国語を使おうという積極性に欠けていた。そのため中国語で会話をする機会もあまりつくれなかった。もつと積極的に、自分から声をかければよかった。

こんなことをサマースクール二〇日目になって悔やんでも仕方がない。来年以降の参加者が同じような後悔をしないことを祈る。

時刻は一五時一〇分を過ぎた。

南京まであと二〇〇キロをきった。前の座席では数人の学生が先生と熱心に議論を行っている。かれらのエネルギー感には圧倒されるものがある。ちなみに今夜も、一人の学生のために誕生日パーティーを企画しているそうだ。まったく頭が下がる。その模様については写真でお伝えすることにしよう。きっと楽しいものになるだろう。

気付くともう一六時だ。反対車線では車が燃えている。



二二日目

辛苦了！

閉会式

今日は南京での生活最終日である。お粥、漬物、肉まん、野菜、西瓜、といった毎朝の朝食も今日が最後で、最初は慣れなかったものの、今となっては明日から食べられないのが少し寂しく感じられるほどである。

一七時半から晚餐があるが、それまでは自由行動である。各々が、まだ行くことのできていなかった観光地へ行ったり、買いきれないお土産を買に行ったり、と活動した。

筆者は中山陵へ行ったが、他の日に行った同学が詳細を書いてくれているので、中山陵でのことはここではあまり書くまい。しかし、そこまでの道中で一寸したハプニングが起こったので触れておこう。私達が住んでいる宿舎から一〇分ほど歩いてバス停まで行き、そこでバスに乗って終点が中山陵、二〇分前後かかる。座席が空いていなかったため、二円を料金箱に入れた後、奥へ進んで立っていた。中国のバスは日本のバスよりも停車時に揺れるので、つり革などを持っていないと転げそうになる。しかし、手すりを持っていたにも関わらず、筆者は急停車の勢いで尻もちをついてしまった。他の同学の数人もこけ、席に座っていた老人も椅子から落ちた。立ち上がってみると、運転手が運転席から離れて、客席の方を向いて何やら叫んでいる。車のナンバーを覚えてあるか、というようなことを言っている。バスの前に自動車飛びこんできたらしい。幸い事故にはならず、乗客のけがもほとんどなかったようだ。日本ほどは道路事情が秩序立っていない中国だが、そうであるからこそ、運転手も常に神経を張って運

転していると思われる。事故にならなかったのは、そのおかげかも知れない。

中山陵の階段を登って疲れた後の昼食は小籠包である。その後、今回のサマースクールメンバーの大半がお気に入りのマンゴーアイスの店へ行って、アイスを食べた。最も高いメニューは三八元であり、日本円に換算すると七〇〇円程度である。贅沢をしなければ夕食で外食しても二〇元かからないのだから、かなりの贅沢品である。しかし、メンバーの中には既に五回食べたものもあり、よほどの気に入っているようである。中国に來たらまた食べたい、という声も他から挙がり、伝統的な中国食だけではないところにも魅力を見出せたということになる。

さて、筆者を含め四人の女子メンバーは先日南京大学の職員の方に旗袍（チャイナドレス）を作っていたが、今日受け取った。現成的ではなく定做的旗袍である。最近ではアレンジされたチャイナドレスもあるようだが、作っていたいたのは伝統的な形の物であり、どの女子学生も綺麗に、かつ妖艶に着こなしていた。

荷造りなどをしているうちに一七時半になり、晚餐が始まった。南京大学海外教育学院の朱院長からお言葉をいただいた。八月四日は翻訳があったが、今日は無かった。それでもほとんどの学生は大部分を理解しており、中国語力は目に見えて進歩したようである。それでも聞き取れない単語はあり、それは日本に持ち帰る宿題となる。各テーブルは教師と学生との会話が盛り上がった。筆者のいたテーブルでは、荷造りの話になった。たくさんの本を買い



込んだ学生が数名おり、重量オーバーを心配する声
が挙がった。学生の自分は学業である。それゆえ起
こった事態であるから、何とか明日までに解決法
が見つかるかといのだが。A班、B班、両班の班長
からも中国語、日本語、両方用いた代表挨拶があつ
た。事前準備されていたわけではないにもかかわらず、
咄嗟に中国語で話すことができるというのには
ただただ尊敬するしかない。このサマースクール
中、皆をとりまとめてくれた二人に感謝である。辛
苦了！多くの料理が丸テーブルいっぱいになり並べ
られ、それを取っていくという中国式の食べ方にも慣
れた私達は、全てのおかずを食べ終わらないまま、
お腹を満たした。全てが食べ終わられてしまうとい
うのは、客人にとって量が不足であるという考えか
ら大目に食事を出すのが中国流なのだそうだ。食後
は恩師たちとの写真撮影である。

このサマースクールでの思い出を残そうと、多く
のカメラが向けられ、晚餐会場は文字通り写真撮影
会場となった。老師老師！と声があちらこちらで
上がる。三週間の共同生活によって培われた学生間
の絆はもとより、お世話になった先生方との絆も深
まった。授業だけでなく、身の回りに関して様々な
手助けをしてくださった先生方に改めて感謝であ
る。

明日の出発は五時である。あとは無事に日本に帰
るのみとなった。荷造りをできるだけ早く済ませ、
明日の朝に備えよう。

二二日目

バスは霧の中を 空港へ

帰国

今日はサマースクール最終日。帰国のためだけの一日である。残念ながらブログに書くこともあまりない。

朝の五時、出発の時間だ。微睡のなか三週間の南京生活に別れを告げる。「もうちょつと真面目に中国語を勉強しておくべきだった」「どこどこに行きたかった」「なになにをしたかった」、別れを惜しむ言葉はとどまるところを知らない。「また来ればいいさ」誰かがつぶやいていた。

前日、荷物のパッキングに手間取り、夜遅かったメンバーも多かったようだ。寝ている皆を乗せてバスは霧の中を空港へ向かってゆく。

到着してみると南京空港は非常に混雑していた。昨日、南京で行われていたアジア青年オリンピックが終わったためのようだ。大会のユニフォームを着たスポーツ選手も非常に多く、空港はごった返していた。われわれの出発が早かったのも、この混雑で出発手続きに時間がかかることを予測してのことであつたそうだ。

あとは、飛行機にのって成田に降り立つだけ……のはずであつたのだが、ここで一つ問題が発生した。なんと気候の悪化で飛行機の離陸が遅れたのだ。飛行機に乗ったまま、外の霧と雨を見ながら過ごす三時間を経てようやく飛行機が離陸した。幸いなことに、お互い三週間の思い出話はいくらでもあり、皆退屈せず三時間のロスタイムを過ごしていたようである。

ここから先は特に書くこともない。三時間遅れで成田空港に到着し、解散となった。そのまま帰省す

るメンバーや、山登りに行くメンバーなどもいるようだ。

ここに第一回中国語サマースクールの足跡として以下の数字を示そう。

履修した中国語の授業…八〇時間

撮影した写真の枚数…一四、一六六枚

この三週間で我々がどれだけのものを学び、得ることができたのか、そして一期生として何を残すことができたのかは未知数である。しかし、そんな我々に機会をくださった方々へこの場を借りて感謝を述べたい。

三週間をともにしたサマースクールのメンバーは互いにとつてかけがえない友人である。今日からまた、皆がそれぞれ自分の道を歩んでゆく。各々の成功と活躍、そして互いの道がまた交わらんことを願ってこのブログの最後としたい。



サマースクール 事前学習プログラム提案書

谷中尚子 ◎文科三類2年

今回のサマースクール参加学生の一人、谷中さんから事前学習プログラムの提案を受け取った。
LAPが提供したサマースクールという「場」を積極的に利用してくれる姿勢をうれしく思う。
次年度以降出来るだけ提案を実現できるよう、プログラムを調整する予定である(LAP執行委員一同)。

一、提案理由

私は今年度のサマースクールに参加し、大変貴重な体験をさせていただきました。現地ですの中国語に触れることができただけでなく、現地の人々の暮らし・文化に触れることができたことで中国という国を身近に感じるこことができ、これからの日中関係を改善していくには自分たちの努力が不可欠であるということ強く感じることもできました。サマースクールは参加者一人一人に何物にも代えがたい貴重な経験となったことでしょう。このような素晴らしい機会が与えられたことを心より感謝しております。

このような素晴らしい機会を提供してくれたサマースクールをより良いものにして、来年度以降サマースクールに参加する学生により多くのものを得てもらいたいという個人的な願いから、このような提案書を提出させていただきました。サマースクールで私たちは毎日かなり膨大な量の課題に追われました。授業が終わった後、食事や入浴を除けばほぼすべての時間を勉強に費やしました。予習、復習、課題が終わらずに就寝時間が深夜になることも多々ありました。就寝が遅れると翌日の授業に

も影響が出ました。また、授業以外の時間のほとんどを課題に追われたことで、なかなか現地でできた友人と交流したり外に出かけたりする時間を確保することができませんでした。確かに勉強が一番大きな目標であることには変わりはありませんが、もっと現地でしかできないことに時間をかけたらよかったというのが正直な感想です。

二、概要

上記のような理由から、タイトルのあります通りサマースクール事前学習プログラムを提案させていただきました。現地で勉強に追われてしまったこととは事実ですが、三週間は短い期間ですの授業の進度をおくらせてもらったり、課題の量を減らしてもらったりする必要はないと思います。

すでに今年度のサマースクール参加者数名から賛同してもらっているのですが、私たちが来年度の参加者が決まってから彼らがサマースクールに行くまでの二か月半程度、彼らに私たちが使った教科書を予習してもらい、それのサポートをするというものを現時点では考えています。

その予習に関しまして、まだ具体的にどのようなことをしたいかは

考えられていませんが、日本で予習を済ませておけば現地での負担も少なくなりそうですし、学習の効率化が図れるのではないかと思います。

来年度以降今年と同じ教科書が使われると決まっている訳ではないようですが、今年私たちが使った教科書は中国語学習者にとって最もスタンダードかつ質の高いものだということを聞きました。もし現地でこの教科書が使われることがなくても、この教科書を学んだ経験は中国語学習に必ず活かせると思うのです。

また、私たちの中国での経験を語る場を設けることで、サマースクール参加予定者はこれからの中国での生活に関するヒントを得られるのではないかと思います。さらに、私たち自身も南京での学習・生活体験を活かすことができます。

今回このような構想段階でまだ具体的な内容を考えられていない段階ではありますが、先生方にもぜひ私たちが、サマースクールの一環としてこのような活動をするここと(とはいえサマースクール参加者の参加を強制するようなことなどは考えていません)をご検討していただけないかと思っています。よろしくお願ひいたします。

活動後記
參加后感

時間配分の再考を

石村脩

理科I類

まず初めに、中国語サマースクールという素晴らしいプログラムを企画してくださったLAPと東大の皆様にご感謝を述べたい。

さて、今回のプログラムに参加した感想と来年へのアドバイスという事であるが、三週間の南京での生活において、この報告書に簡単にまとめるには多すぎる体験をした。そこで、今回はサマースクールにおける「時間」についての感想と来年以降への要望をまとめた。

サマースクールにおける時間は、様々な充実したプログラムが行われていたほか、日常生活、授業の課題、ブログの記事作成とやるべきことが非常に多くあり、スケジュールは常に厳しいものにならざるをえなかった。

まず、問題となったのは勉強時間の不足である。

午前中に授業があり、午後には授

業、もしくは観光が予定されている中で、授業内で出される課題をこなすことも、時間がなく非常に難しかった。また、観光と授業と、温度差のある環境の中で、自身の中の切り替えを行うのも難しかった。この点での来年に向けての提案の一つとしては、前半に授業、後半に観光というようにプログラムを分けることがある。

確かに今回のプログラムでも廬山の観光が最後に行われたように、ある程度観光とそれ以外という形で分けられていた。しかし、ここからさらに、南京の観光もプログラムの後半に持つてゆくことで、前半に行われる授業により集中して取り組むことができるようになると思われる。

次に問題となったのは授業や観光以外の側面で、必要以上に時間がとられてしまったことがある。具体的にはブログの記事の作成や、アップロードな

どである。これらは旅先ということもあり、コンピューターに慣れていないメンバーにとっては大きな負担となっていたように感じる。また、ホテルのネットワーク環境もあまり良くなく、「金盾」による制限があったこと、期間中に筑波大学の提供するVPNサーバーがダウンしたことなどもあり、PC環境の不快適さはなかなかのものとなっていた。これらの環境については来年以降も大きく改善するとは考えづらいが、東京大学にVPNサーバーを用意することや、VPNモデムを用意するなどの方法によってある程度改善することができるのではないかとと思われる。

また、私はブログが今回サマースクールにおいてどのような立ち位置のものであったのか結局よくわからなかった。サマースクールのメンバーの中でも「ブログの記事を書くのは大変そう」、「本当に書かなくてはならないのか」といった意見も多くあり、最終的にブログの記事の投稿を途中で放棄するメンバーも出るなど、この件はメンバー内での不和を引き起こしていた唯一ともいえる事象であったように思う。

また、ブログの記事に関しても、

後日先生方から要望が出て修正するなどのこともあり、これもまた負担となっていた。来年以降は、何をどのように書いたらよいのか、また、このブログが何のために書いているのかという点について、事前にメンバー全員に対して共有することによってより労力を減らすことができるのではないかと思う。

そして、時間に関する問題の最後として、プログラムのコンテンツの量に対するプログラムの期間の短さが挙げられる。

わざわざ日本を出て南京まで来ているということから、できる限りのことをしたいという大学側や我々メンバー自身の希望をかなえたプログラムではあったが、私を含め何人かのメンバーが軽く体調を崩すなどということもあり、プログラムの内容がもっと少なくてもよかったのではないかと感じた。そこで、なにもしない時間の大切さというものも学んだように思う。

以上、今回のプログラムの問題点ばかりを挙げてきたが、私にとってこのプログラムは大変満足のゆくものであり、今後の人生において大きな影響を与えるものとなったことは間違い無い。

円滑な事前顔合せを

出射有紀子 理科Ⅱ類

出発前 私がこの中国語サマースクールを履修しようと思った動機は、「安く海外に行けるから」と「せっかくなので第二外国語の中国語をもう少し勉強しときたいな」という軽い気持ちでした。一年生のときの中国語の成績は、良でした。しかも理系ですから週二しか中国語は履修しておらず、必修以外の中国語のクラスは履修していませんでした。さすがにまずいと思い、出発前に緑の教科書（注：『現代漢語基礎』白帝社）を見直しました。インテンシブのコースを取っておらず、サマースクール履修者と連絡を取り合ってもいなかったもので、事前に顔合わせの食事会が有志で開かれていたことも知りませんでした。私たちの方で Facebook や LINE でグループを早くから作成していれば、もう少し事前の顔合わせがスムーズだったのかなと思います。

クラス分け 最初のテストは単語と文章読解と作文と会話です。作文と会話の採点のされ方によってクラス分けが適当でなくなるおそれがあると思いました。鈴木君と谷中さんはBクラスでしたが、他のBのメンバーと比べて中国語のレベルは数段高いと思いました。特に聞き取りと話すことに関してです。クラス分けを人数で区切るのではなく、レベルの差のキリがいいところで区切ると良かったかもしれない。しかし今回Bにもレベルが高い人がいて、他のBのメンバーのモチベーションになったり、授業の質の高さにつながったりしていました。Bのメンバーとしてはありがたかったです。

授業内容 会話の先生の邵老師は、学生の出来不出来に関わらず粘り強く私たちの会話を試みてくれたし、とにかくかんことを言っても中国語で軌道修正してくれました。学生の発表に対していつも「好的好的」と自信を持たせてくれました。授業のしゃべりのテンポもよかったです。総合の先生も優しく、私たち一人ひとりにあった指導してくれました。そのせいかな、出来る人に質問を集中させたりしていて悔しかったです。

宿泊環境 一日にクーラーの効きが悪くなり暑くて眠れない日がありましたが、王前先生を通してホテルの方が部屋を一時的に移動させたり、次の日にエアコンを直してくださったりときちんと対応して下さったので良かったです。

引率の先生方 今回私は祖父のお葬式のために一時帰国することとなりました。突然のことに対して鄧芳先生や南京大学の先生、王前先生、刈間先生には大変お世話になりました。すぐに帰りのチケットを確保していただいたり、南京に戻りたいという私の要望にも、沢山の方法を提示して下さい、とてもありがたかったです。

最終テスト テストの形式がはじめてのクラス分けのテストと違ったので、（例えば、会話重視のクラスでは、はじめのテストは簡単な会話形式で最後のテストはスピーチ形式でした）中国の授業を受けての私たちの語学力の伸び方を測ることができているのかなと、少し疑問でありました。会話の先生は、授業中に、最初の簡単な会話形式をもう一度私たちにテストして下さいました。その会話ではクラスみんなが割りりとスラスラ答えられており、語学力の伸びを感じました。

廬山観光 廬山での観光を、プログラムに入れて下さっていて、滝を見たり、毛沢東の奥さんの別荘を見られたりといろいろ勉強させていただきました。ただ、片道六時間もかかる場所にわざわざ観光に行かなくてもいいのかなと思いましたが、観光をプログラムに入れて下さるのはいいことですがもう少し近場が良かったです。

生活の中の中国語 私は一時帰国するまで、谷中さんと、中国語オンリーで会話しようとしていました。やはり、そうすることは語学力向上にとっても有効だと思います。今後の、とくにレベルも高い学生が来るのですから、サマースクール期間中日本語禁止にしたらいいいのではないかと思います。

最後に 三週間はもちろん、事前の準備、手配など大変お世話になりました。この恵まれた機会を今回出会ったサマースクールの仲間達と、社会に還元できるよう、有効に活用していきたいと思っています。

中国語授業に重点を

内田聖菜 理科Ⅱ類

このサマースクールに参加して、私は自分のキャパシティをはるかに超えるほどの多くの刺激を受けてきた。南京大学の学生と同じように大学の寮に入って授業を受け、学食で食事をし、夜はある程度自由に行動できる時間があり、それを勉強に当てるも夜の街の散歩に当てるも自分次第で、周りに日本人が沢山いることを除けば南京大学に普通に留学しているのと変わらない生活を送ることが出来た。このように地元の人目線で生活することで、旅行ではわからない南京の活気を知ったり、一人では歩けないような細くて暗い道を歩いたりして、南京のさまざまな面を垣間見ることが出来た。さらに一緒に中国に行った東大の仲間たちからも想像以上の刺激を受けた。彼らは東大生の中でも特に自分を高めようとする意識が強いと感じた。例えば中国語で一人っ子政策に関する討論をする

準備を五、六人で集まって日付が変わるまで話し合ったこともあったし、またある日には南京大虐殺記念館に行った感想を同屋と夜二時くらいまで時が経つのも忘れて語り合ったりもした。こんなに自分の意見をぶつけられるようになった人は東大生でも殆どいない。このサマースクールは文系も理系も同じように取ることができ、その割合も大体半分くらいなので、互いに意見を交わすと互いの考え方の切り口の違いが面白く感じられる場面も多くあっただろうと思う。

最後に廬山観光があったのもとても良かった。ブログにも書いたが、南京だけを見ていても南京を知ることとは出来ない。南京だけに滞在していたら、南京だけを中国と思ってしまいかねない。廬山に行つて、気候も食も、言語(方言)も南京とは違う地の存在を知ることとて、広い中国の中で南京や廬山の特

徴を感じることが出来た。特にこれが日程の最後に位置していたので、一通り勉強を終え、自分の中国語力の向上を感じたり、あるいは勉強不足を悔やんだりすることが出来て、また、最後の試験も終わり、旅行感覚で観光することも出来た点で良かった。

しかし、実際にこのスケジュールで生活するとなかなか思うようには上手くことは運ばなかった。まず、勉強する時間が殆ど無く、仕方なく睡眠時間を削るしかない日が多々あった。人によって今までの中国語の勉強量は全然違うので、同じ宿題でもかかる時間は人によって大きく違っていった。毎日七時間もの睡眠をとってそれでもきちんと宿題をこなせている人もいたが、あまり勉強をしてこなかった私は、殆ど毎日四、五時間の睡眠で我慢するしかなかった。せっかく中国に来ているのに授業中に眠くなってしまうたり、体のだるさを感じながら午後の中国文化の体験をしたりするのはもったいないことだと思った。それに、私たちは宿題をしに中国に来ているのではない。テレビにかじりついて中国語シャワーを浴びたり、読めないながらも新聞を目で追ったり、街に出て新しい中国語を聞いたり、あるいは同学たちの中国

語に圧倒されて死に物狂いでテキストの単語を端から覚えたりしたいのだ。毎日午後に中国文化に触れられるスケジュールを組んでくださるのはとてもありがたい、確かにとても実のあるものだったが、例えばそれらを全てスケジュールの後半に持つてくるのはどうだろうか。中国語の授業を一日三コマくらいに増やし、あとは全てフリタイルムにすれば、それぞれが自分の思うような方法で中国語力を高められるだろう。また、授業で使うテキストを予め数か月前に配ってもらっていたら、予習をすることができて授業がよりスムーズに進むし、テキストの練習問題を各自が解いてくれば宿題に費やす時間は大幅に減り、より中国にきた意義のあるサマースクールになっただろう。

こんなことを書きつつも、やはり第一回サマースクールは大成功だった。本当にたくさんさんの経験をさせていた。このサマースクールの準備をしてくださった東大の先生方、南京大学の先生方、資金を出してくださった方、そして温かく見送ってくれた家族や友達みんな、本当にありがとうございました。

百聞は一見に如かず

木下綾華 理科Ⅱ類

今回この講義を受講しようと考えたのは、無論、中国語力をつけたいと考えたからである。それなら駒場での授業をたくさんとればよいではないか、と言われてはそれまでであるが、二年生になると第二外国語が必修ではなくなるため、中国語を勉強したいというモチベーションがあっても、つい日々の雑事に追われ、結局自分からはあまり勉強しないだろうと考えたのである。三学期は案の定そうなってしまう。もともと、中国語中級会話を受講はしていたが、自学の時間はほとんどとらなかった。

私事ではあるが、ここで、自分の中国語を勉強するモチベーションがどこにあるのかを述べておく。私の母は中国人であるが、父は日本人である。母の日本語が父の中国語よりも遥かにうまいため、家の中では全くといっていいほど中国語は使われていない。それ

ゆえに、私は、中国語をほとんどしゃべれないまま成長してしまったのである。しかし、母方の親戚は皆中国人である。従姉とも会話できない。家族なのに、である。つまり、そのモチベーションの第一にくるのは「家族と話したい」という思いであり、このサマースクールの趣旨とは少しずれていたかもしれない。

さて、前置きが長くなってしまったが、このサマースクールの感想を書いていこう。最初、私はこのサマースクールでは中国語をひたすら勉強する、というプログラムだと思っていた。しかし実際は、太極拳の授業や南京市内、揚州への観光、などなど座学の授業だけでなく、中国文化に触れる機会が多くあった。また、自由時間も多く、近くのスーパーで買い物したり、またプログラムでは行かない市内の観光地に行ったり、と自分たちで積極的に動

いて、中国とはどういう場所なのかを知ることができた。例えば、スーパーの買い物で気づいたことのひとつとして、食料品は基本的に安い、電気機器などは日本と比べても大差が無い、ということである。特に海外ブランドの物は日本の方が安いのでは、と思うほどであった。そのような経験をした後、ちょうど中国経済についての講義があり、関税が非常に高いのだという。ああ、そういえば、どこかで聞いたことがある、と思った。きっと現代社会か何かの授業で習ったのである。しかし、百聞は一見にしかず、とはまさにこのことである。実際に生活

してみても、自分が買い物しようという姿勢で物の値段を見ると随分と印象に残る。ちなみに、この経済の授業は英語を交えながらであるのに加え、スライドに書いてある中国語を見ながらであったので、比較的理解しやすかった。音だけであると分からなくても、見ればある程度雰囲気がかめるのが漢字のよいところであると感じた。

寮は非常に住み良かった。学生にとつてあまりに良すぎると感じるほどだった。家庭的な中華料理がかなり安く食べられる「老地方餐厅」というレストランや小さな売店、スーパーマー

ケットが非常に近く、日用品を買うのには便利な立地であったこと、ベッドメイキングが毎日入ること、授業を受ける教室と建物がつながっていることなど、環境に恵まれすぎているのではないかと感じた。

最後に、非常に一般論となってしまうが、このプログラム中はなるべく積極的に活動し、自らの五感を使って中国の地を知るべきだろうと思った。歩くと埃っぽい空気や、道端の屋台からする肉まんの匂いや、車が何度も鳴らすクラクションや、化粧をほとんどしていない女性たち、など、伝聞だけでは分からない中国の（今回は南京の）風土を感じることは、ただ理論だけで考えるのは難しい中国の文化理解に直結すると思うのである。

今回、一緒に勉強に励み、生活を共にしたサマースクールメンバー、講義や生活面での手助けをしてくださった先生方、職員の方々に御礼を申し上げたい。

語学力養成に焦点を

齋藤晴紀

文科Ⅲ類

授業について

今回のサマースクールの中国語の授業はどれも大変有意義であつたと感じています。授業で使ったテキストは当然ながら全部中国語で書かれ、慣れるまでは少々戸惑いましたが、その点も含めて難易度は少し難しく感じる程度であつたので、適当だつたと思います。また、授業内容もただテキストを進めるだけでなく、「優酷」(Youku)にアップロードされているドラマや映画を見ることができ、こういった動画も勉強に役立つということを教えていただきました。

授業を担当してくださった先生の中には、日本語が話せない先生もいらつしやいましたが、その点が不便だと感じることはありませんでした。しかし、特に授業の最初の方では、自分たちが、先生が中国語でおっしゃっていることを聞き取れないため理解できず、先生

は何とかわかりやすく伝えようとしてくれるのですが授業が止まつてしまふ、ということが多々あり、自分たちの実力不足ではあるのですが先生に対して申し訳ないと感じていました。

歴史、経済、書画、太極拳や東大の先生方の講義などの中国語以外の授業も興味深い内容ではありましたが、特に歴史、経済の講義内容を中国語オンリーの授業で聞き取って理解する力量は自分たちには無かつたので(少なくとも自分はそう感じました)、正直内容は半分も理解できていなかったと思います(経済の先生は、自分たちのために時折英語も使って講義をしてくださいました)。書画や太極拳は身体や手先を使うので、先生とのコミュニケーションは比較的取りやすかつたです。口語、総合汉语に比べて作文の授業のコマ数かなり少ないようにも感じたので、中国語力の養成に焦点を合

わせるのなら、中国語以外の授業の割合は少し減らしても良いのではないかと感じました。

授業以外の活動について

自分は中国に来たのは今回のサマースクールが初めてでしたので、企業見学や揚州、廬山の旅行などの課外活動はどれも新鮮な経験で、楽しむことができました。休日を利用して南京市街をぶらぶらと歩くこともできましたが、平日は授業やその他の活動でスケジュールがびつしりと詰まつていたということもあり、南京の街をゆっくりと歩く時間があまり取れず、馴染むことができなかったことは残念に思います。東大の先生の講座があつた日は授業終了が二二時をまわることもあり、復習や翌日の予習がままならなくなりそうだったこともあつたので、次年度はもう少し余裕を持ったスケジュールを立てて、空き時間を少し増やしてもいいのではないかと思います。

サマースクール全体について

一九人を二つのクラスに分けるといふ形のメンバー構成は、クラスごと、そして全体でも仲良くすることができ、とてもちょうど良い構成だったと思います。自分はAクラスの班長でしたので課外活動時の人数確認や先生方

との連絡などの仕事を少々担当しましたが、暮らす人数も一〇人であり多くなく、もう一人の班長と協力出来たので、それほど大変ではありませんでした。LAPからお借りしていた携帯も大変便利でしたので、来年以降、もし人数編成が増えるとしても一つの班に一台は貸し出してもらえると良いと思います。また、今回は事前に無線LANのアクセスポイントを持参したメンバーが多く、それを利用してホテル内ではスマートフォンでの連絡をお互いに取ることができたのですが、もしアクセスポイントを持っていない人がいなかったり、少なかつたりした場合、メンバー間での連絡が不便になってしまうことが予想されますので、その点の対策は事前に講じておくのが良いのではないかと思います。

追記

今回ブログの更新を担当してくれた石村くんですが、かなり大変そうにしていたました。来年以降は、誰か一人のメンバーに負担がかかることがないよう、ブログの管理はLAP側で行っていただく(当日のブログ記事と写真をLAP担当者の方にメールで送信する、など)方がよいのではないのでしょうか？

選択授業制導入を

スクリット Vinayavekhn Sukrit 理科I類

私にとって今回のサマースクールは南京二回目となった。一回目は今年の三月に一週間くらいLAPのプログラムで訪れた。そのとき、講義はすべて日本語で行われたし、野外実習&ヒアリングはすべて日本語科の大学生が通訳してくれたので、中国語を使う機会がなかった。それでも、そのときは南京の様々な所、物事を案内してもらったから、正直なところ今回のサマースクールに参加した理由は、中国文化に触れるというより中国語能力を高めたかったのである。しかし、実際にこのプログラムに参加してみたところ、中国語能力は確かに上がったと実感できたが、それより元々期待していなかった中国文化もより深く勉強することができた。それは、短期間滞在するのと長期間滞在するのでは、それによって得られた経験が違ってくるからである。短期間の滞在だと、日本文化と中国文化を

比べることで気づくことが確かにいっぱいあったが、長期間の滞在となると、気づくことというより中国文化に慣れてきて、その文化・習慣の理由などが分かるようになった。また、このプログラムは南京&東京大学の先生の授業や企業見学、揚州訪問など有意義な活動がいっぱいあった。これは普通の語学留学とは比べ物にならないくらい素晴らしいと思うながら、こんな機会を下さった先生方をしてすべての関係者に感謝の気持ちでいっぱいである。

アドバイス

ルームメイト 同じ時間に睡眠をして起床するルームメイトがいいと思われる。この件に関して今回のサマースクールにおいて二部屋にはちょっとしたトラブルがあったようである。ルームメイトを変更できるように柔軟な体制が必要と思われる。また、私はルームメイトを選ぶとき、同じクラスの人

や知り合いなどを避けて文系の人とルームメイトになった。最初は性格が合うか心配していたが、仲良くやって来られた。ルームメイト生活を通して、理系と文系の違いがはっきりわかった。そして、他の人を巻き込んだ小さな討論会もやっていった。テーマはジェンダーや多数決、一人っ子政策などについて幅広く討論していた。このサマースクールは中国語を勉強することだけでなく、知識交換の場でもあると振り返って改めて思った。

クラス分け 文系と理系にはやはり中国語能力の差があるように感じた。私は理系である上に中国語インテンシブを受講していなかったため、同じBクラスになった文系の友人たちとは最初は差が結構あった。しかし、先生は出来がいい人のリズムに合わせて授業を進めていた。私は授業に付いていけず失望したりもした。でも、それがその差を埋めるような努力のきっかけとなった。

中国語クラス 日本語が母国語ではない私には日本語と中国語の違いを感じた。それは発音に注目すると、知らない単語を聞いた時、日本語は聞いたまますぐ辞書で調べられるが、中国語は発音を聞き取りにくくピンインが書か

れていないと調べにくいという点である。また、知らない単語が出てくると、先生は漢字しか書かないこともしばしばある。もっとピンインを書いて欲しいと思った。

他の授業 太極拳や南京の歴史、中国の経済、中国の書道など大変勉強になった。学生が自分に合うようなカリキュラムに選択できたのもっとよくなるかもしれない。メンバーによってはやりたいことが違うのが現実である。茶道をやっている人は中国の茶道を習って比べたいなど事前に調査をとってから授業を構成するより充実したプログラムになるのではないかと思う。

自由時間 今回のサマースクールには自由時間が少ないように思った。授業は六時までがほとんどである。晩御飯は中国の食文化を見習って集団で食事する上にホテルの近くにはレストランが少ないため、八時くらいまで外にいくことが多かった。部屋に戻ったら、宿題と予習復習をしていたら、すぐ睡眠時間になったのである。ときには、宿題だけという日もあった。このように、自分の興味、自分が属している団体またはサークルへの時間配分ができない人も結構いたようである。

自由時間を確保して

鈴木英太 文科Ⅲ類

私は今回の南京におけるサマースクールに参加した。ここではその事後報告として、その感想と来年度以降このサマースクールに参加する後輩へのアドバイスを記す。

まずは感想としてよかった面から。このサマースクールの最大の長所は、何と言ってもその費用の安さである。私は毎日しっかりと食事をとり、本を二〇冊ほど買い、土産も買って、それでもなお払った総額費用は約二万五千円であった。三週間滞在してこれほど安く済むものは少ない。奨学金の申請などの煩雑な手続きもする必要がなく、航空券、ビザの手配等もしていただいたので、手間という点からもとて

も楽をさせていたのだ。このサマープログラムの目玉である、中国語の授業も素晴らしかった。授業は基本的に中国語で行われ、実践的な口語重視の授業で大変力になっ

た。テキストも良質なものが二つ用意されており、重なる部分があったが、むしろそれが良い復習となった。教えてくださる先生も、外国人に中国語を教えるのに慣れておられるようで、質の高い授業をしてくださった。授業数は毎日五〇分×四回受けることができた。そのような授業をみっちり駒場で受けることができるならば、みんな中国語を役に立つ程度にまで使えるようになることだろう。

中国語以外の授業もどれも興味深かった。東大の先生の講義からも様々なことを学べた。たくさんのお光地も訪れた。廬山も一人だったために行かないような場所なので、よい経験になったと思う。中国の人との交流もあり、楽しむことができた。

では、よくなかった点、改善した方がいいと思った点。一番には自由時間が少なかったことだろう。ここにいう

ことは遊んだり、街を散策したりする時間がないということだけでなく、勉強をするための自由時間がなかったことであり、それがとても残念だった。

例えば、中国語の授業で宿題のため、もしくは私などはものすごく勉強に耐えるやる気が出て自主的に勉強したいと思うのだが、そのための時間がなかった。一つ、私だけでなくみんなうんざりしていたのは、日々のレポートというもののだろう。文章は当日書くのいいにしても、それと写真を当日アップロードする必要はなかったと思う。私は手早く済んだが、ほかの同

学たちの多くは、中国のネット回線が悪いこともあり、日をまたぐまで時間がかかってしまっていた。あと、ありがたいことだが、この観光のための時間が多かったと思う。夫子廟などはいかなくてもよかったのでは、などと思ってしまった。もう一つ強いて言えば、もっと中国人の学生と交流できる機会、時間が欲しかったというはある。

後輩たちへのアドバイス。南京のサマースクールでは、とてもいい環境で勉強ができる。付き添ってくださる先生方もとても親切だ。海外で生活するための常識の範囲内での準備だけで問

題なく生活はできると思う。なければスーパーで買えばいいのだし。生活上では私は全く問題を感じなかった。私のルームメイトは屋台のものを食べてお腹を壊して寝込んだが、ほかの二、三人は屋台で食べてもぴんぴんしていた。そこは自己判断で。食事はちゃんとした店で美味しいものを食べるのがいいと思う。安いし。

むしろアドバイスするとしたら勉強上のことだろう。駒場での、テキストを先生が一方的に解説するというスタイルではなく、先生は生徒たちにどんな質問を振ってくる。恥ずかしがって答えなかったり、中国語の能力が低くて先生の質問がわからなかったりすると、授業の効率が悪くなるし、雰囲気も悪くなる。おそらくこれからあのサマースクールに参加する諸君は、例のトライリンガルプログラムを受けている人たちだろうから大丈夫だと思うが、ぜひ積極的に勉強してほしい。厚意のお金で勉強させてもらうわけだし。

勇気を出して：

鈴木寛太郎 文科Ⅲ類

今回中国語サマースクールに参加させてもらい、三週間南京で過ごしたが、個人的にはいい経験をさせてもらったと思う。三週間という期間の中で、集中して中国語に取り組むことができたし、中国の文化や人々の生活について、直接的な感覚を伴った経験をする事ができた。また毎日のように顔を合わせていたこともあり、一緒に行った学生とはかなり親しくなることができた。交友関係がせまい僕にとって、これはかなりうれしいことであった。

滞在場所が南京ということもあり、中国に旅立つ前はいろいろと不安も多かったが、いざ行ってみるとそこは非常に魅力的な土地であった。食事やサービス、設備などの面では確実に日本に劣るが、なぜだか私は日本に帰りたいという気持ちでいっぱいになった。

理由の一つとして、現地の人々の人柄の良さがある。たしかに店員や従業員は無愛想で、初めは戸惑ったが、話しかければ普通に應對してくれるし、ひとたび話しだすと、中国人は非常に気さくで明るいということがわかってくる。そして我々が外国人であるとかると、「どこからきたの?」「いつまでいるの?」などと矢継ぎ早に尋ねてくる。南京市民の中には我々日本人に対して好ましくない感情を抱いている人々もいたはずだが、私たちが「日本人だ」と知って嫌な顔をする人には、ほとんど出会わなかった。

一方、中国語の能力を向上させるという点では、プログラムの内容、学生の意識の両面で、ともに改善点があったと思われる。

プログラムの面では、南京大学の学生と交流する時間が非常に限られていたと思う。確かに何度か交流する機

会は設けられていたが、日程の大部分は私たち日本人学生のための授業や観光であった。そのためどうしても日本語を使ってしまうことが多く、話す能力をさほど向上させられなかったと感じた者もいたと思われる。できれば現地の学生と会話をする、せざるを得ないような機会がもっとあるとよかった気がする。

しかしこれは南京大学が夏休みであったことなどを考えると仕方がないようにも思える。むしろ重要なのは、われわれ日本人学生の意識である。

私は中国語の学習を始めてまだ一年半しか経っておらず、思ったことを中国語で自由に表現できるような力はまだない。したがって普段の生活の中ではどうしても日本語が使える仲間とつるんでしまうが、せっかく南京に来ているのだから、もっと中国語を使ってみようという意識があってもよかったと思う。限られた交流の機会の中でも、何人かの学生は積極的にコンタクトをとっていたし、自分からどんどん機会を生み出す者もいた。彼らは総じて中国語が上達したに違いないし、交友関係も広がったであろう。それに対して、中国語を上達させたいと思っているのに積極性に欠けていた自分が情

けない。一步踏み出せば、中国語で会話を場所などどこにでもあったはずである。大事なのは勇気を出して話しかけることである。中国語が上手いか下手かではない。

今回は自分の中国語のレベル、そして意識がまだまだ低いということを痛感した三週間であった。個人的には必ずもう一度南京を訪れるつもりなので、日本で今まで以上に中国語の学習に精を出し、次に中国に行くまでに少しでも上達したいと思っている。

今回のサマースクールでは、刈間先生、王先生、鄧先生をはじめ、非常に多くの方々にお世話になった。簡単ではあるが、この場を借りてお礼を申し上げたい。そして来年以降サマースクールを実施するにあたり、もし必要であれば、いつでも協力させていただきたく思っている。

事前に教材配布を

高橋知子 文科I類

まず私が参加を決めた動機について述べ、続いて実際に参加して得たことについて記したい。最後に総括として全体の感想を述べる。

私が本プログラムに参加した動機は、二つある。一つは、自分の目標である外交官になる前に、中国語の読み書き・会話ができるようになりたい、というものである。多様な言語がある中で中国語に取り組もうと思った理由は、八歳から一年半北京に住んでいたことがあり、地元の方々と中国語で直接話したいとの思いが当時からあったうえ、大切な隣国であり続けるであろう中国の言葉は、仕事でも使うことができるようになりたいと考えたからである。今回重視したいと考えたのは、日常会話の練習と文法の定着である。動機の二つ目は、寮生活を通じ人間的に自立することである。食事など物理的なサポートをはじめ、精神的にも支

えである家族のもとを離れることで人として成長できるのではと考えた。

実際に参加して得たことを自分の二つの動機に照らして考えたい。前者の中国語の向上に関しては、授業がすべて中国語であったため、聞いて理解する力が伸びたと思う。話すことに関しては、自分の語彙数が少ないことを実感した。今後は語彙の強化に取り組むたい。また、文法に関しては、授業で学ぶ発展的な内容を消化することにも苦労した。後述する全体の感想にもある通り、毎日異なる午後の活動に取り組むことは、有意義である一方、予想以上に身体が疲れる。そこで私は、夜の学習時間を早めに切り上げ、早め起きて続きをやるようにした。私は第二外国語がフランス語選択であるため、ピンインの読みを調べるなどの授業前の予習・宿題・語句テストの勉強に時間がかかり、新たに習った文法事項を

自主的に復習するゆとりがなかった。ひとまず詰め込んだが、定着という観点からは今後努力を続けたい。

後者の、寮生活を通じた人間的自立に関しては、おおむね達成できたと思う。朝起きるのが苦手なため、先生方・友達にご迷惑をおかけしてしまうことが多々あり、ここでお詫び申し上げたい。今後規律正しい生活を心がけたいと思う。一方、体調・メンタル面の管理において、自分で何事も決めて異国の地で元気に過ごすことができたのはよかった。特に廬山観光において、大雨のなか滝を見にいった際、往復共に歩き切ったのは大きな自信になった。

以上に加え、今回私が予期せずして得た最も大切なものは、ルームメイトをはじめとする、かけがえのない友達である。はじめはほとんど面識のない人ばかりで不安が大きかったが、今となっては何事も遠慮なく話せる仲間である。また、科類の異なる友達と学際的な話をすることができ、大きな刺激となった。友達の主催する日本のお茶会への参加を通じて、触れる機会の少なかった自国の文化を学んだり、チリからの留学生と交流したりすることもできた。率先して仲間のために仕事をする人が多く、友達の行動そのものから

も多くを学んだ。

最後に全体の感想を述べたい。本プログラムの難しさは、日本の教室でもできる語学学習を、敢えて中国でやることで、休日や午後に用意されていた生きた体験とうまく結び付けられるかどうかにあると思う。授業ばかりだと中国で学ぶ意味がなく、午後の活動が多すぎると肝心の学習内容を消化する時間がなくなる。これは永遠の課題であるが、今後の参加者各個人が如何に上手く時間をやりくりするかにかかっていると思う。改善の余地があるとするならば、事前に使う教材を配っていたら、学生が予習を出発前に済ませることで、現地では自主的な勉強ができたのではと思う。このバランスの難しさは友達も感じていたようだが、このように苦労も楽しみも分かち合った仲間と出会えたこと、寮で掃除をしてくださる地元の方と仲良くなり、日本の歌を歌ったことなどは、「サマープログラムの目的」などという堅苦しい縛りでは絶対に表せぬ貴重な経験である。ここに本プログラムが大変濃密な三週間であったことを報告し、主催してくださった東京大学・南京大学の先生方、お世話になったすべての方に感謝の意を表し結びとしたい。

文理バランス考えて

田中雄大 文科Ⅲ類

今回のサマースクールの主な目的である中国語運用能力の向上についてはある程度達成できたのではないかと、うのが個人的な感想である。基本的に授業の内容は生徒たちが最も苦手とする「聴く・話す」に重点が置かれていたのでもって有意義だった。先生方が多少の英語・日本語を交えながらも基本的には中国語のみで授業をすすめていくというスタイルはまさに今回のサマースクールの目的に適していたように思う。

ただ数点、改善すべきではないかと思える点もあった。一つには授業時間の短さである。三週間のサマースクールでありながら、授業が行われたのは実質二週間分だけであるというのは非常に勿体ないと感じた。また各日の授業が午前中のみであった点も勿体なく感じた。確かに予習・復習の時間を考慮すると一日授業ばかりにするという

のは不可能であるが、しかし午後には無駄な団体旅行や太極拳・中国書画といった子供だましのプログラムを入れるくらいならば寧ろ予習・復習を伴わない授業（例えば教科書を用いない自由会話の授業など）を入れるべきだろう。加えて土日には授業がなかった点も残念であった。確かに休息は必要なのだが、土日明けの月曜日には中国語を聴き話す力が衰えているのを実感したので、短い時間で良いから土日にも授業を行うべきであると思う。

他に改善すべき点として、南京大学及び東京大学の先生方による講義の内容が挙げられる。両大学の先生方が講義を行うという試み自体は非常に面白いのだが、内容があまり興味深いものとは言えなかったように思う。南京の歴史や経済に関しては内容と呼べるような内容はなかった。これに関しては内容よりも、寧ろ中国語で授業を受け

た。

もう一つ改善すべき点として、旅行が多すぎることとが挙げられる。今回のサマースクールの目的の一つとして、中国文化への理解を深めるというものもあるように思ったが、そのためには、バスで観光地に乗りつけてガイドの説明を聞いてぞろぞろ歩きまわるといったスタイルの観光は全く意味がないように思う。個人的にツアー旅行が嫌いであるということもあるのだが、それを抜きにしても、ツアー旅行よりは各個人がそれぞれ自分なりに興味を持っている場所に行くという方が、様々な点においてよいのではないだろうか。

という体験自体が重要であるのではないかと感じ、そのコンセプト自体は非常に有意義なものであると感じた。たまたそのコンセプトの下で講座を組むのであれば、生徒がどの程度理解できているのかを逐一授業中に確認するなどの工夫が必要なのではないかと感じた。実際の授業では、理解できない箇所はただ黙って音を聞いているだけで、理解できる箇所は理解できてもまったく面白くないというどっちつかずの印象を受けた。また東大講座に関しては日本語で行われたので、中国語の上達には一切寄与しないし、内容に関してもトピックは面白いのにあまりにも浅すぎ、ないし紹介に徹しすぎているというように感じた（折角日本語で授業をしているのに）。またほかの一つの提案として、どのような授業内容がよいのかを事前に参加者に聞き、それを基に授業内容を決定するというのはどうだろうか。今回の授業はいずれも文系向きで、理系の生徒の中には関心が湧かなかつたり、そもそも日本語ですら内容を知らないのので、ましてや中国語となると全くわからないという人もいた。また逆に文系の生徒にとっては、内容があまりにも浅すぎて面白くないのではないのかと感じ

課題量の調整を

谷中尚子 文科Ⅲ類

今回のサマースクールは私にとって大変すばらしい経験となり、今後の学習や生活に大きな影響を与えてくれるきっかけとなったと思う。

私はこれまで海外に長期滞在したことがなかった。観光客としてではなく、現地で生活するものとしてはかの中国人と同じように（とはいえ特殊な環境であるが）生活を送ることができ、新たな視点を得ることができた。中国人がどのような環境で生活しているのか。どんなところで買い物をし、どんな食べ物を食べ、どんなテレビ番組を見るのか。どうでもよい些細なことのようにも感じられるが、こういうことを知ることこそが、私たちが中国や中国人を理解するための第一歩となるのではないかと感じた。現地の中国人とも期間中に徐々に会話できるようになり、これまで私が抱いていた、中国人は気が強そう、怖そう、といったイ

メージは覆された。一度知り合うと中国人はみなとても親切にしてくれ、優しい笑顔を向けてくれたのは大変印象深いことである。特に私は班長を務めたため、南京大学の学生とのやり取りを任せられるなど、貴重な経験の機会を与えられたことに感謝したい（向こうの学生は私たちの中国語の数倍日本語がうまく、おどろかされた）。

学習面においても、中国語に毎日触れることができたため耳を慣らすことができた。これは最もよかった点であると思う。教科書は日本で学習してきたものと比べてさほど難易度が高いようには思われなかったが、単語や文の構成など細かい知識を増やすことができ、語感を鍛えられたのではないかと思う。ただ、残念であったことは、毎日授業時間が長いうえ、予習・復習・宿題の量がとても多く、何事も中途半端になりがちであったことである（私

の要領の悪さが影響しているのかもしれないが）。毎日課される課題の量が多く、最終的にはとにかく課題を終わらせることに重点を置いてしまうよう

になっていた（特に予習・復習は不十分であったように思われる）。睡眠時間が短くなってしまう、授業中に眠くなってしまったり、少し体調を崩してしまったりした生徒もいたようである。せっかく南京に来ていたのに勉強に追われすぎ、学校の外に出て現地の人とかかわる時間があまり持てなかったのは残念であった。また、私は同部屋の友人と中国語で会話するように心がけていたが、全体を通して日本人同士は日本語でやり取りする流れができなくなってしまったので、モチベーションを維持するのが難しかった。そのあたりは集団で留学する際には免れられない問題であると思う。

留学や中国語云々とは別の話になってしまうが、サマースクールを経て、自分の考えをためらいなく話せるような友人ができたことは何物にも代えられない。今回のサマースクールが私に与えてくれたものは本当に大きかったと思う。サマースクールに携わってくださったすべての方に感謝の気持ちでいっぱいである。サマース

クールが今後の参加学生にとっても有意義なものとなるよう心から願っている。

P. S.

今回のサマースクールを経ているいろと私なりに考えたこともあり、より次回のサマースクール参加者がサマースクール期間に有意義な時間を過ごしてもらうためにはどうするのが良いか、僭越ながら構想を練っています。まだまだ漠然とした大枠しか考えられていないので、考えがまとまり具体的な案ができましたら再度連絡させていただきます。その際はぜひ話を聞いていただけますよう、よろしくお願いたします。

観光か、交流か

津田貴生 理科I類

サマースクールの期間は三週間でしたが、ほぼ毎日予定がぎっしりである上、毎日の授業の予習もする必要があり、講義や観光が終わって自由に時間を使えるようになるのが一〇時近くになることもあり、正直きついところがありました。南京では連日気温が四〇

を超えることもあり、体力的に厳しかったかもしれません。それでも、サマースクールのメンバー皆、大きく体調を崩すことなく無事日本に帰ってくることができたので、よかったと思います。引率の先生方がいつも気にかけてくれたおかげだと感謝しています。

中国語の授業についてですが、僕自身はもともと中国語を勉強してから南京に来るべきだったと思います。根本の語彙力、表現の知識が足りなくて授業中の中国語がさっぱり聞き取れないことが多かったからです。もちろん自分の中国語力はサマースクールに参加

する前と比べて上がったとは思いますが、参加する前からある程度会話できるレベルのメンバーのほうが、より積極的に中国語を運用して上達の幅が大きいように思えました。

毎日のホテルでの生活環境は基本的に問題がありませんでした。メンバーの部屋が一一階から一三階にまたがっていたのですが、石村君が各階に無線LANを設置してくれたので、皆インターネットを自由に使用できたようでした。けれども、端末を持っていない人もいるわけで、全体で連絡を取り合うのに些細な支障が出た場面もありました。ホテルの外に出れば、連絡を取る手段はLAPから貸し出されている携帯だけとなるため、はぐれたら決して帰ってこれないわけではないといえ、グループで行動するように心がける必要があります。特にトラブルは起きなかったとはいえ、来年度以降も

南京の学生との交流は、現地の学生は夏休みでなかなか学生が集まらなかったのが現状のように思いました。また、仙林キャンパスの見学のあと、向こうの学生との食事がありました。が、帰りのバスの時間が迫っていたため、かなりあわただしいものになり、それぞれ一部の人とししか交流ができなかったように思いました。新街口での学生との交流でも、まず刈間先生が講義で紹介してくださったDVDショップに全員で行くことになったのですが、なかなか見つかることができず、現地の学生のスマホでの地図機能を頼りにやっとたどり着けましたが、限られた時間の中、かなりの時間を消費してしまいました。現地の学生を招待したお茶会は、南京に来る前から周到に準備をしていた甲斐もあり、先述のとおり中国人の学生は帰省していたため少なかつたけれども、南大に留学している様々な国籍の学生が参加してくれて、大いに成功したように思いました。仙林と新街口での交流では、どのような学生がどれくらい集まってくれるかはなかなか正確には把握できかねるところではありますが、観光と交流、どちらに重きを置くかはつきりしたうえで、もう少し踏み込んで計画を立てていけば、より充実したものになっていただろうと思いました。

毎日一人ずつその日の体験をブログにまとめる課題がありました。これは人によっては就寝時間が深夜になるほど、かなりの負担になっていたようでした。ブログの内容、体裁について先生方からメールで指示を受けて、責任者である石村君のダメだしが多々ある場合があります。訂正しなくてはならないからです。LAPの先生方のみならず、資金を提供してくださったゼンショーの方、教養学部長等もご覧になつていてということなので、きちつとしたものにしなければいけないのはわかりますが、来年度以降は全員に周知されるように、あらかじめ日本にいる時点でブログを書く上での細かい諸注意を示しておく必要があると思います。ブログを書くのに時間を奪われ十分に休養がとれなくて、万一その後の活動に支障が出るようでは本末転倒ではないかとさえ思いました。

休日確保して

豊島理史 文科Ⅱ類

感想

良かった点としては、宿舍の居心地が非常に良かったということが挙げられます。アメニティもしっかりついていて、ベッドメイキングもあり、教室へは建物内の移動をするだけで着いてしまうのはこれ以上ない環境でした。宿舍の目の前に安くて美味しいレストランがあるのも良かったです。また、鄧先生や王先生を始めとする、滞在生活へのきめ細かい気配りとサポートがあったことは一番素晴らしいと思います。南京の町に関して言えば、風光明媚な場所です非常に気に入りました。

不満点としてはまず第一に、スケジュールが多すぎたということです。平日に授業が多くても良いから、休日は二日確保して欲しいと切実に思いました。休日のツアーは任意参加にした方が良いでしょう。確かにツアーで行って

良かったところもありますが、それ以上に古本屋を巡ったり、読書をしたり、散歩をして中国の色々な姿を眺めたり、郊外の農村を少し見に行ったり、毛沢東語録を暗唱してみたり、休日は人それぞれの形で有意義な時間を過ごすことは可能です。今回サマースタールの試みが初めてであり、スケジュールを縛った方が無用なトラブルを引き起こさない点で何かと安心であるという心情は理解しているつもりですが、それが行き過ぎていた面は否めなかったと思います。授業以外で一律のプログラムを規定するのはあまり良くないことだと感じました。

第二に、メインとなるべき中国語の授業が少なすぎました。三週間のプログラムと言っても実際に授業があるのは一〇程度のもので、それも午前中だけなので、正直な話、分量的に不十分です。中国語の授業の量を増やした

方が良いでしょう。特に作文の授業は少なすぎました。代わりに企業訪問、中国経済、中国の歴史の授業などは分量的にあまりに中途半端であり、意図もよくわからなかったので削っても良かったと思います。

第三に、自習室が不十分だったことが挙げられます。教室がいつ空いていていつ空いていないのかよくわからず、夜に行くとはとんどの場合閉まっております、結局また宿舍に戻る事が多くありました。宿舍の部屋の照明は明るさとしては不十分で、手元が暗い状況で予習復習をやるのは非常に辛く、効率もあまりよくなかったです。

第四に、海外に行くことが初めての人が多いことも考慮して、外務省の海外安全情報は一度みんなで見を通す機会を作った方が良かったと思います。

後輩へのアドバイス

多彩なプログラムと、一緒に時を過ごす学生同士の交流があつて、毎日が新鮮で楽しくてつい自分が何故南京に来ているのか忘れそうな時があります。けれども、一番大事なのは中国語の勉強であることを忘れないようにしないといけません。勉強をしっかりやることを前提で言う、積極的に宿舍

の外に出ることをおすすめします。南京は非常に歴史の長い街です。予め南京に関連する書籍、小説を読んだり、論文を検索してみたりして前提知識を蓄えた上で散歩をすると、南京の滞在がより深みを持ったものになると思います。最低限の注意さえ持っておけば、中国で嫌な思いをすることは滅多にありません。むしろ親切を受けて感謝することの方が圧倒的に多いと思います。

日程にゆとりを

中村理人 文科I類

今回の中国語サマースクールは、とてもよい経験になった。中国語漬けの三週間を送ることができたことにも大きな意味があるが、そもそも、私はこれまで外国へ行ったことがなかった。そのため、南京での三週間では、見るもの聞くもの全てが初体験であり、非常に新鮮な体験になった。そのような貴重な体験を与えていただいたことに、まずは感謝したい。

南京で過ごして特に印象深かったことは、現代中国の様々な側面を目の当たりにしたことである。大学の近くには高層ビルが立ち並んでいたが、その中には南京で最も高いビルがあった。非常ににぎやかな繁華街にも出くわし、著しく成長する中国を目の当たりにした。その一方で、お金を恵んでもらおうとする人にも出くわし、貧困に苦しむ人がいまだに存在するということも忘れてはならないと感じた。

また、八月一五日の出来事も印象的であった。一五日は南京大学の学生との交流ということで、新街口へ出かけた。その際に、本屋で店員と話す機会があったのだが、日本人かと聞かれたものの、特に敵視されるわけでもなく、そのまま一〇分ほど会話を楽しんだ。このことについて落ち着いて考えてみると、中国人と言うと最初に戦争を思い浮かべ、不安を覚えるということとは、とても失礼なことではないか、と思われた。全ての中国人が日本人に対して敵意を抱いているということはあり得ないし、そのように思いこんだままでは、今後建設的な関係を築くことが難しくなってしまうであろう。思い込みに惑わされるのではなく、自分の目ではっきりと確かめることが大切であると感じた。

さて、授業について。八〇時間にわたってみっちり中国語で中国語の授

業を受けるというのは、かなりハードなことではあったが、特に、聞き取る能力が向上したと感じられる。授業が始まった当初は、先生方がおっしゃる内容を理解するのに一苦労であったが、日が経つごとに聞き取ることでできる単語が増え、また、慣れてきたために、かなりの部分を理解できるようになった。これは大きな進歩であった。

また、今回のサマースクールでは、中国語以外にも篆刻など様々な体験をする機会があった。これらの体験では、専門的な用語が多く使われていたため、理解するのに苦労した。事前にこういった用語をピックアップした紙が配布され、予習する時間の余裕があったならば、理解がより深まったと思う。

全体に関して言うならば、少し予定がタイトで忙しかったのが残念であった。午前中に中国語を学び、午後に様々な体験を行うという形で毎日が過ぎていったが、もう少し時間の余裕が欲しかったと思っている。夜一八時以降は毎日自由時間であったが、夕食を食べに行き、次の日の授業の予習をしていると、それだけで時間が終わってしまう。せっかく南京に来たのだから、もっと街を自由に散策してみたかったと感じている。自分達のみで街

を散策することによっても、中国語を学ぶことにはなるであろうし、さらに、等身大の中国を肌で感じることもなるであろう。やはり、ある程度の自由時間は必要ではないかと感じられた。

最後に。初めての土地で三週間を過ごすということは、かなりハードなことではあったが、多くの先生方が、私達のことを気遣い、サポートして下さったおかげで、不安になることもなく、無事にサマースクールを終えることができた。

ありがとうございました。

参加を考える君へ

三原直幸 理科I類

南京での生活は日本のそれと異なる点も多かったが、あらかじめ多くのことを教示してもらったため、戸惑うことは少なかった。トイレや、交通の話など、担当の先生から説明があるであろう。私は、それ以外のアドバイスを書き留めていこうと思う。

バスについて述べると、本数が非常に多く、目の前で目当てのバスが行ってしまうのを目撃しても、残念に思う必要はない。時刻表はないが、日本のバスも時間通りに運行するとは限らないので、かえって合理的かもしれない。路線バスは二種類あり、一回二元のものと、一元のものがあある。一元のものには、冷房が備わっていない。ただ、これは来年には変わっているかもしれない。「南京的变化很大」であるのだ。地下鉄についても現在路線を増やす工事をしている。出かける際には、バスの路線図が入っている地図を

片手に、バスと電車を活用すると良い。ちなみに電車も、大体は二元で足りる。

南京にいるあいだ、ずっと宿泊していたホテルの環境も、とても良い。毎日タオル、バスタオル、スリッパ、シャンプーなどが新しく支給される。ただし、部屋が汚い場合、あるいは気まぐれに、スリッパを新しくもらえなかったりするようだ。私は卓球をする際にスリッパを利用し——そうすると一発でボロボロになってしまいもう履けなくなる——毎日新しいのを使用していたが、新しいのをもらえない日も多く困ってしまった。

平日は基本授業であるが、その予習・復習は意外と大変だ。夜にもプログラムが入っていることもあり、休む時間が十分でない日もある。朝早起きして勉強するのもありだろう。夜の睡眠に加えて、昼寝をする同学も多かった。実際、昼寝ができるように、昼休

みは一四時までと長い。ただ、睡眠生活に関して注意しておきたいことがある。私たちは、ルームメイトを決めるとき（基本二人で一部屋である）、夜早く寝るか、割と遅くまで起きているかの二つのグループに分けることから始めた。なかなか良いアイデアに思えたが、その「早い」「遅い」の定義がなく、同じ「早い」グループでも夜寝る時間が大幅にずれ、苦労した部屋もある。平日の授業開始は午前八時。東大での生活リズムと比較し、圧倒的に早寝早起きの生活を送ることになるだろう。それを考慮した上で、大体の就寝「時刻」によってルームメイトを決めるのもありかと思われる。

学習に関してだが、説明会にて、南京に着いてから教材が配られることもあり、「出国前に何かやる必要はない。そして、自分で教材を持っていく必要はない」というようにアナウンスがかったが、（当然かもしれないが）時間允許限り、南京での授業が始まる前であっても中国語の勉強をするのとが望ましい。また『基礎漢語』など、慣れ親しんだ教材を持っていくことは、南京での学習の大きな助けとなるはずだ。強くおすすめする。

南京では、中国人の学生はもちろ

ん、南京に他国から留学してきた人達とも交流する機会が持てる。実際南京大学に留学に来ている学生は多いようで、今回私たちは中国人の学生に加え、チリ人の学生（といっても、大学を出ている方たち）とも、卓球をしたり、夕飯を食べに行ったりする機会を持った。いろんな話をしたが、とりわけ日本のアニメの話で盛り上がった。日本からのお土産に、日本の（あまり新しくない）アニメのグッズなどを持っていったら、喜んでくれる人も多いのではないか。私の場合、アニメは見ずに漫画を読むことが多いが、そうすると主題歌まではわからない。ぜひ、アニメの主題歌は映像とともにチェックしていくと良いだろう。

最後になるが、今回のような機会を与えられたことに、とても感謝している。自分の狭い世界に閉じこもっていてもダメだと感じた。今後も東京大学と南京大学の交流が活発に行われていくことを願っている。

充実感、青春

武藤麗子

理科Ⅱ類

三学期のはじめ、興味が持てない理系科目の必修から解放された喜びを噛み締めながらシラバスをめくっていた時に目に飛び込んできたのがこのプログラムであった。中国語留学を考えていた矢先でもあり、また刈間先生には映画論でお世話になったこともあり、迷わずこのプログラムに応募させていただいた。

今回の私が参加した一番の目的はなんとといっても中国語力の向上であるが、中国文化に親しみ、生身の中国人と交流することで中国という国に対して抱いていたステレオタイプを一新したいという思いも、語学を頑張りたいという思いと同じくらい、あるいはそれ以上に強いものであった。

その点、午前中は教室での学習、午後は文化に触れる時間、というカリキュラムはとても魅力的で、私の要求を大いに満たしてくれた。夕方や週末

は自由時間が多く取れたこともあり、現地の人々とも思い思いに交流することができたため、「很満足」である。

ただしあまりに充実しすぎていたため、特に一週間目はなかなか体力が追いつかない面もあった。先生方にお昼寝を勧められて実行するようになってからはだいぶ楽になったが、日々の授業の予復習を真面目に行おうとすると私の場合かなりの時間を要してしまい、夜遅くまで電気を点けざるを得ず、同屋に迷惑をかけてしまった。出かけたがり屋で、授業後や週末、ほぼ毎日街に繰り出して自分のせいでもある。少しでも多くのものを吸収したい、新しいものと出会いたいという好奇心というか探求欲は満たされることなく、私は次から次へと姿を見せられる中国の新たな一面や魅力にすっかり虜になっていた。

一週間目は生活リズムがまだ把握で

きていないため、来年以降はソフトスケジュールな計画を、個人の活動にゆとりができるように組むとよいのではと思った。しかしハードであった分、充実感は大学入って以降一番といっていいほどあり、青春しているなという精神的充足感を感じられたため、私としては過密なスケジューリングで満足している。また、おかげさまで体力や精神力は大いに身に付いたと思う。

二週目はだいぶ要領を得てきたためか、日々の生活を楽しむ余裕が生じてきた。一週目との大きな変化は、自分の中国語能力の向上がふとした拍子に感じ取れるようになったこと、予復習がスムーズに行えるようになったこと、そしてこちらの食事に慣れ、体調が回復したことなどが挙げられる。このあたりから、サマースクールのメンバー間での強い絆を感じるようになった。日々の授業で顔を合わせるのは必然であるが、夕食やちょっとした外出を共にするたびに仲が深まっていくのが感じられた。中国では、日本ではめったにないハプニングが度々生じるが、（例えばバスの運転手が途中で運転を止めて道路に降りて喧嘩をしに行ったりと）その度に同学達の存在を心強く感じた。帰国した翌日、早速同窓会に

参加してきたが、一生付き合いたいと思える友達をたくさん得ることができたと強く実感した。

二週目の週末からプログラム終了までは時間が飛ぶように過ぎていった。仲間とテスト勉強をし、お茶会の準備で頭を悩ませ、飲み会や誕生日会で騒ぎ、加えて廬山への旅行もありと、本当に怒涛のような日々であった。

様々な行事を通じ、中国語運用能力の向上はもとより、中国という国に対する印象を自分の中で再形成できたことが今回の一番の成果だと思う。限られた情報しか入ってこない日本国内で作られたイメージを、実際に自分の目で見、聞き、肌で感じ、会話することで、現実に即した形にアップデートする事ができた。そしてなによりもかけがえのない友達と貴重な経験を若いうちに得ることができた。このような機会を与えてくださった先生方に心より感謝を申し上げたい。

本当に、本当にありがとうございます。

中国語サマースクールの感想

鄧芳 サマースクール前半担当教員

教養学部付属グローバルコミュニケーション研究センター「英中トライリンガル」プログラム特任教員の鄧芳と申します。二〇一三年八月四日から一五日にかけて、引率教員の一人として「南京大学中国語サマースクール」の前半に参加させていただきました。初めての引率の仕事でしたが、大変面白く、若い学生たちと留学の楽しさを共感でき充実した十二日間でした。まず引率教員として、この場をお借りして、プログラムを主催してくださった東京大学・南京大学の先生方とサマースクールを支えてくださった関係者の方々、そして私にこのような大変楽しく、貴重な仕事を与えて下さった先生方および参加者の学生の皆さんに感謝の念を述べさせて頂きたく存じます。

サマースクールが終了して一ヶ月半経ちますが、私が感動したこと、得たこと、そして今でも心に残っていることを、述べさせて頂きたいと思います。

まず私が一番強く感じたことは「留学の楽しさ」でした。私自身はもうとくに留学生ではないのですが、毎日学生たちと一緒に留学の興奮と感動を味わうことができ、非常に良い経験でした。出発の日、集合時間より三〇分早く空港に着きましたが、学生たちのほとんどが到着し、私を待っていました。「興奮して全く眠れなかった」と言ってくれた学生も何人かいました。学生たちの楽しそうな顔を見ると、自分もなんだか学生時代に戻ったようで、留学に対する期待が膨らみました。中国人である私にとっては、中国で出会った人々や環境、生活すべてがもう新鮮ではないはずですが、南京では毎日、学生たちに「先生、なぜ中国は……」、「先生、なぜ中国人は……」などたくさん聞かれて、自分の国でのごく普通の日常生活の中から数多くの新たな発見がありました。

例えば「なぜレストランでビールを注文すると『冰的还是常温的?』（冷やしてあるビールかそれとも常温か）と聞かれるのか」とか、「なぜ夏でもあまり冷たいものを飲まないのか」、「なぜ牛乳に砂糖を入れるのか」、「なぜ昼寝という習慣があるのか」、「なぜ携帯電話はマナーモードにしないのか」、「なぜ週末にテレビのお見合い番組がこんなにも多いのか」、「なぜ中国のドラマはどれも長いのか」など。このような質問に対して私はすべて上手に答えられるわけではありませんが、学生との交流はとても刺激になりました。学生たちの質問のおかげで、以前まで私にとって当たり前だと思っていたようなことやありふれたことが、改めて新鮮に、面白く感じられました。自分が日本に留学した当時のことも思い出しました。私が九年前に初めて日本に来た時も、同じように見るもの聞くものの全てが新鮮で面白く、不思議に思い、よく日本人の先生や友達に質問（時にはちよつと変な質問）をしていました。また留学前は、中国で身につけた常識がみんなの常識であるかのように思っていました。日本に来て初めて「文化や環境が違えば、常識も違う」ということを実感し、世界の大きさと多彩さを知ることができました。それと同時に、自分の常識と違う考え方や方法に触れることで、自分・自国をさらに客観的にとらえるきっかけとなりました。留学当初のさまざまな疑問に対する理解が深くなるにつれて、新しい考え方や常識、そして違う国の人がどのように異なり、またどのように同じであるのかを徐々に理解し、異文化理解の楽しさを感じるようになりました。私が自分の留学経験から実感したのは、留学の楽しさとは、まず何よりも、「違う」という良さを発見、また理解できるようになる楽しさです。このたび私は引率教員として、学生たちの好奇心、探究心、勉強意欲のお蔭で、改めてこのよう

な留学の楽しさを感じることができ、この有意義な仕事に心より感謝いたします。

このサマースクールで感じたことのもう一つは、「サマースクールは言語の勉強だけではない」ということでした。ともすると中国語という言語の勉強だけを考えがちですが、実際に学んだのは決して語学だけでなく、その言語を使い、自分の目と耳で中国のことを見聞きし、中国人とより多く触れあい、理解することも、サマースクールの目的の一つに間違いないでしょう。今回は、基本的に午前は中国語会話と文法の授業、午後と夜、休日は中国文化講座、太極拳、工場見学、昆劇観賞、中国人学生との交流、観光など、さまざまな生きた体験が用意されていました。言語の勉強だけでしたら東大の教室でもできますが、せっかく中国に来たからには、やはり色々なことを経験してもらいたい、という思いから、南京大学の先生方はこのような大変濃密なスケジュールを作ってくださいました。一方、多くの学生から「午後の活動が多すぎて、午前中の授業内容を予習・復習する時間がない」という意見が多く出されました。午前中の授業をそれぞれ一回しか聞いていないのですが、確かに宿題の負担が大きく、予習・復習の分量も多いと感じました。毎日夜二時まで勉強した学生も少なくなかったそうです。授業時間、活動時間と自由時間のバランス、および勉強と体験をいかに両立するかが、これらのサマースクールでも課題となると思います。学生のサマースクール前半の成長の様子を見ると、まず、中国人の先生方に直接指導して頂き、中国語の生の会話の楽しさ、難しさに触れることが非常に良い勉強となったようです。特に授業でのさまざまなテーマについての話し合いは、中国語で考える力を養うことができ、とても良い訓練でした。また学生たちがとても積極的に生の中国語に触れるきっかけを探したことが、中国語能力の向上につながったと思います。学生たちによると、放課後みんな積極的に活動し、本屋を訪れたり、中国人と卓球やカラオケをしたり、マッサージ店に行ったりもしたそうです。語学だけでなく、色々なことを経験できたこの充実したサマースクールは、きっと学生たちの心

の糧になると信じています。大変濃密な三週間の中で、確かにさまざまな苦労もあったかと思いますが、「これこそがサマースクールなのだ」と理解してくれた学生も多いようです。それと共に、学生たちがお互いに支え合いながら困難を乗り越えた姿や、留学の苦労も楽しみも分かち合って仲良くなった様子を見て、引率教員として私は感心すると同時に、なんだか羨ましいとも思いました。

最後に、今回参加した学生たちに出会えて本当にうれしく思っています。わずか三週間ですが、学生たちの努力、自立力、団結力を見て、「学ぶことは本当に楽しく素晴らしいものだ」と改めて実感できました。毎朝、留学生宿舎で掃除をしてくださるおばさんは、会うたびに、「あなたの学生はいい子ばかりですね。礼儀正しく、きれいで、部屋をいつもきれいに片づけてくれます。さすがに東京大学の学生ですね」と感心して褒めてくれていました。本当に、皆さんの引率教員であることを誇りに思います。このサマースクールでは学生の皆さんに恵まれ、私自身さまざまな事を学び、得られたものも多い大変実りある時間となりました。心よりお礼を申し上げます。(二〇一三年一〇月二三日脱稿)

サマースクールをふりかえって

王前 サマースクール後半担当教員

二〇一三年八月に三週間にわたって展開されたTLP初のサマースクールは、刈間先生をはじめとする先生方のご指導とご協力のもとで無事に終わりました、ホッとしているところです。私にとっては初の引率で、大変貴重な経験をさせていただいただけでなく、またたくさん学ぶこともできて、感謝の気持ちでいっぱいです。

三週間を振り返ると、今回のサマースクールは初めての経験なので、現地での日常生活には果たして学生たちが慣れうるのか、最初は少なからぬ不安も感じましたが、幸いなことに皆さんが健康管理をきちんとしておかげで、基本的に病気をすることなく、全員無事に帰られたことが、引率教員にとって、最も感激することであり、大変ありがたかったです。海外生活を経験した学生が何人かいて、嬉しいことに全体的に皆さんは外国での食生活にまったく問題がなかったようです。暑い日が続いている中でも、おいしいレストランを「発掘」したりして、食事をちゃんととっていたことが今回のサマースクールの成功につながった要因の一つだと思います。

日常生活のほかの面では、宿舎の設備の不備や故障など、最初のころは学生の皆さんに影響を与えたところがあり、前半担当の鄧芳先生もかなり苦労なさいました。例えばインターネットの接続問題とか、エアコンの故障とか、バスルームの備品の問題とかが起こって、心労をかけたと思います。基本的に問題のない宿舎ですが、そういったちょっとしたトラブルによって、学生の精神面にも多少不安を与えましたので、今後は南京大学海外教育学院の担当者と連絡をとって、できるだけ短期留学に支障を与えないように、意思疎通をしたいと思います。

市内観光と廬山観光に関しては、南京大学海外教育学院の担当の先生

方が充実したプログラムを組んでくださって、非常に良かったと思います。フリーの時間もあったので、皆さんはそれぞれ自分の関心のある場所を思う存分観光したりして、非常に有益だったと思います。現地での座学は不可欠ですが、同時に自分の目で中国社会を観察し、普通の中国人と付き合い、色々自分で経験するのも大切だというサマースクールの重要な目的を達成するうえで大きな役割を果たしたと思います。一つだけ、来年のために南京大学側の担当者に伝えたいのは、廬山観光のプログラムにあるラフティングを外してほしいということです。出発する前にプログラムを読んだときは、特に問題を感じることもなく、了承いたしました。現地に着いた後、ガイドさんの話では毎年のように人身事故が発生しているので、ラフティングに参加するには、引率教員のサインが必要だったのです。学生の安全を最優先課題と考える南京大学の担当教員と私の判断で、仕方なく中止することにしました。少し残念に思った学生がいたかもしれませんが、学生の安全のために、そうせざるを得ませんでした。廬山での観光は、もともと自己負担になっていた食費を、ガイドの工夫で、払った費用で工面してもらえたので、皆さんの金銭的負担の面で非常に助かりました。

勉強の面では、学生諸君はかなりよくがんばったと思います。南京大学の先生方が親身になって教えてくださったおかげで、それぞれ収穫がありました。毎日のように出たネイティブの先生方の授業は刺激的で、特にヒアリングなどは効果的だったと思います。授業の時間割に関しては、少し時間を割きすぎたものもあったのではという意見もありました。作文の授業の必要性に関しても少し異論があったようですが、全体的には、基本的に参加した皆さんは授業に対して満足しているようで、実際

の感想に基づいて多少修正すればよろしいかと思えます。その辺は私自身授業をあまり聴講していませんので、学生の皆さんの意見を尊重したいと思えます。

来年に向けて、今年の経験を生かすために、当然教材の面では今のTLP生のレベルがだいぶ高いので、二回目ときはどういうテキストを使うべきかに関して、向こうの担当者とは今後連絡を取る必要があるかと思えます。そのために、朱副院長が提案した教材の交換がとてもありがたかったです。ちょうど来年度二年生の教材を決める段階なので、しっかり検討させていただいたうえで、向こうに伝えたいと思います。

もう一つ、学生からの意見として報告すべきことは、同世代の中国の大学生との交流が少なかったことです。ただしちょうど夏休みなので、これは難しい課題のようです。実際今年は、日本語部の学生が数人来られただけで、海外教育学院の先生方に頼んでも実現する可能性はちょっと低い気がします。あくまでも、可能ならばの話です。

全体的に見ると、われわれの目的は基本的に達成されたと思います。学生たちが毎日担当を決めて書いた日記を読めば、そのことが証明された感じがします。行く前のさまざまな心配、たとえば、歴史問題とか、南京という場所の日本人に対する態度とか、われわれだけでなく、親御さんたちも心配したことは実際何の問題にもなりませんでした。まさに百聞は一見にしかずということわざのとおりで、日本の将来を背負う若い皆さんが自分自身の目で見られたこと、これが一番重要な収穫ではないかと思えます。特に政府間の関係が悪化している昨今では、われわれのサマースクールのような地道な努力がいっそう重要であると期待しています。南京大学の先生方も学生の皆さんの勉強ぶりに感心して、大いにほめてくださいました。これもすばらしい交流の一環となったと言えますでしょう。今後は今年の経験を汲んだ上でもっと充実したサマースクールになると信じております。(二〇一三年一〇月二〇日脱稿)

王前 グローバルコミュニケーション研究センターTLP特任准教授。専門は政治哲学・思想史。著書に『中国が読んだ現代思想——サルトルからデリダ、シュミット、ロールズまで』(講談社メチエ、二〇一一年)など。

参加学生の皆さんへ

次年度に向けて

白佐立 LAP特任助教

今回、第一期サマースクールを実施するに当たっては、正直様々な不安があった。しかし実際に実施してみると、参加学生の皆さんが積極的に他の参加者とコミュニケーションを取り、積極的に学習する姿勢を見て、不安は雲散霧消した。また、現地滞在中だけではなく、日本帰国後も週一回学食で「チャイ語ランチ」を開催したり、時折同窓会を開いたりと自主的な活動を通して今回のサマースクールで得られた「仲間」とのつきあいを継続しており、皆さんにとってこのサマースクールが単に中国語を学ぶ場としてだけではなくより重要な意味を持ったと確信している。

来年度のサマースクールはさらに充実した内容を提供できるよう、皆さんから寄せられた意見（本活動報告六〇〜七五頁）を貴重な資産としてプログラム内容を修正していきたい。例えば、授業と観光ツアーの時期を分けること、事前に教科書を配布することなどは来年度のプログラムに取り入れたいと考えている。

ただし、皆さんがサマースクールで学ぶ目標とは一体何なのか、については皆さん自身で考えてもらいたかった。私たちが用意したカリキュラムは語

学中心ではあるが、その他にも短期間で中国文化の一端に触れられるような授業や見学を設けている。皆さんからは語学授業以外の活動を減らしてほしいという意見もあったが、私が参加学生であれば、むしろ自分がどのような準備や勉強をすれば、語学以外の授業も自分の糧になるか考えるだろう。

また、日々のスケジュールについて、授業意外にも予習、復習があり、さらに『南京日報』（本活動報告一四〜五七頁）の記事作成に追われ、きつく感じたことは事実であろう。そのため、自由時間をもつと確保してほしい、あるいは『南京日報』の記事は一体何をどのように書いたらよいのか、何のために書いているのかを「指示」してほしいという要望もあった。現地で毎日の記録として一日一人が記事執筆を担当し、ネット上にアップするという課題を考案した私には、確かに中国のインターネット事情に対する配慮が欠けていたことは否めない。この点については申し訳なく思っている。ただし他方、このような課題を出した意図は、皆さんが南京滞在中に五感を研ぎ澄まし、敏感に自分を取りまく環境を観察し、南京について考えてほしいという思いからであった。この『南京日報』は皆さんに絶えず思考を

促す、まさしく「媒体（メディア）」として機能することを意図したのである。事前説明会の際に、私が敢えて具体的な目的や書き方を示さず、単に「ジャーナリストになったつもりでブログを綴ってください」と説明したのは、やはり皆さん自身で南京での日々の生活について考えて貰いたかったからである。ジャーナリストのように社会に対して鋭いアンテナを持ち、新たな視点や現象を追いつめ、自分が「発見」したことを文章にすること、これが本来皆さんに対して私が期待したことであった。しかし皆さんの参加感想を読んで、私は正直言っていささか落胆した。「受験勉強」を終えて尚日が浅く、大学での思考方法、自分で考え、問いを立てる、といった学問姿勢にまだ慣れていない皆さんには、私の設定した課題はやや難易度が高かったのかもしれない。

以上、いくつか苦言も呈したが、第一期サマースクールに参加した皆さんには大変感謝している。サマースクールが無事に終了できたのは、刈間文俊先生、王前先生、鄧芳先生に現地で引率していただいたお陰でもあるが、なにより参加者の皆さんの努力と自発的な行動があったからだと思う。参加者の中で、帰国後も次年度の参加者に向けて学習計画を提案したり、LAP主催の他の企画に参加していただいた谷中尚子さん、鈴木寛太郎さん、齋藤晴紀さん、内田聖菜さん、三原直幸さんには特にここに記して謝意を表したい。

白佐立 教養教育高度化機構LAP特任助教。専門は台湾都市史・住宅史。著書に「黄緑色のフェンスの向こうに——台湾における軍人村II眷村をめぐって」（荒川歩他『境界』の今を生きる）東信堂、二〇〇九年 など。

東京大学中国語サマースクール
2013 年度活動報告

[編集・デザイン]
新田龍希

[発行]
東京大学リベラルアーツ・プログラム (LAP)
☎ 153-8902
東京都目黒区駒場 3-8-1
東京大学教養学部 9 号館 302 室、17 号館 1732 室
Tel. 03-5465-7671 (#47671)
admin@lap.c.u-tokyo.ac.jp
http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp

2014 年 6 月 30 日発行

©U Tokyo Liberal Arts Program 2014

謝辞 (敬称略)

本プログラムは、
株式会社ゼンショーホールディングスからの
寄附金により実現いたしました。
ここに記して謝意を示します。

リベラルアーツ・プログラム執行委員会

[執行委員長]
刈間文俊 総合文化研究科超域文化科学専攻 | 教授

[執行委員]
伊藤徳也 総合文化研究科超域文化科学専攻 | 准教授
清水晶子 同上 | 准教授
原和之 同上 | 准教授
林少陽 同上 | 准教授
渡邊正男 史料編纂所 | 准教授
渡邊雄一郎 総合文化研究科広域科学専攻 | 教授
石井弓 教養教育高度化機構 | 特任准教授
白佐立 教養教育高度化機構 LAP | 特任助教
赤木夏子 同上 | 特任研究員
根岸理子 同上 | 特任研究員
新田龍希 同上 | 教務補佐員

[スタッフ]
浜口一恵 教養教育高度化機構 LAP | 事務補佐

